

平成 30 年度
事業報告書

(平成 30 年 4 月 1 日から平成 31 年 3 月 31 日まで)

学校法人 高知学園

目 次

	頁
I 法人の概要	
[1] 教育方針	2
[2] 学校法人の沿革	4
[3] 設置する学校等の状況	7
[4] 設置する学校等の学生生徒等数の状況	10
[5] 役員・評議員の概要	11
[6] 教職員の概要	14
II 設置学校の事業報告	
[1] 高知学園短期大学	15
[2] 高知中学高等学校	28
[3] 高知小学校	35
[4] 高知学園短期大学附属高知幼稚園	41
[5] 高知リハビリテーション学院	45

I 法人の概要

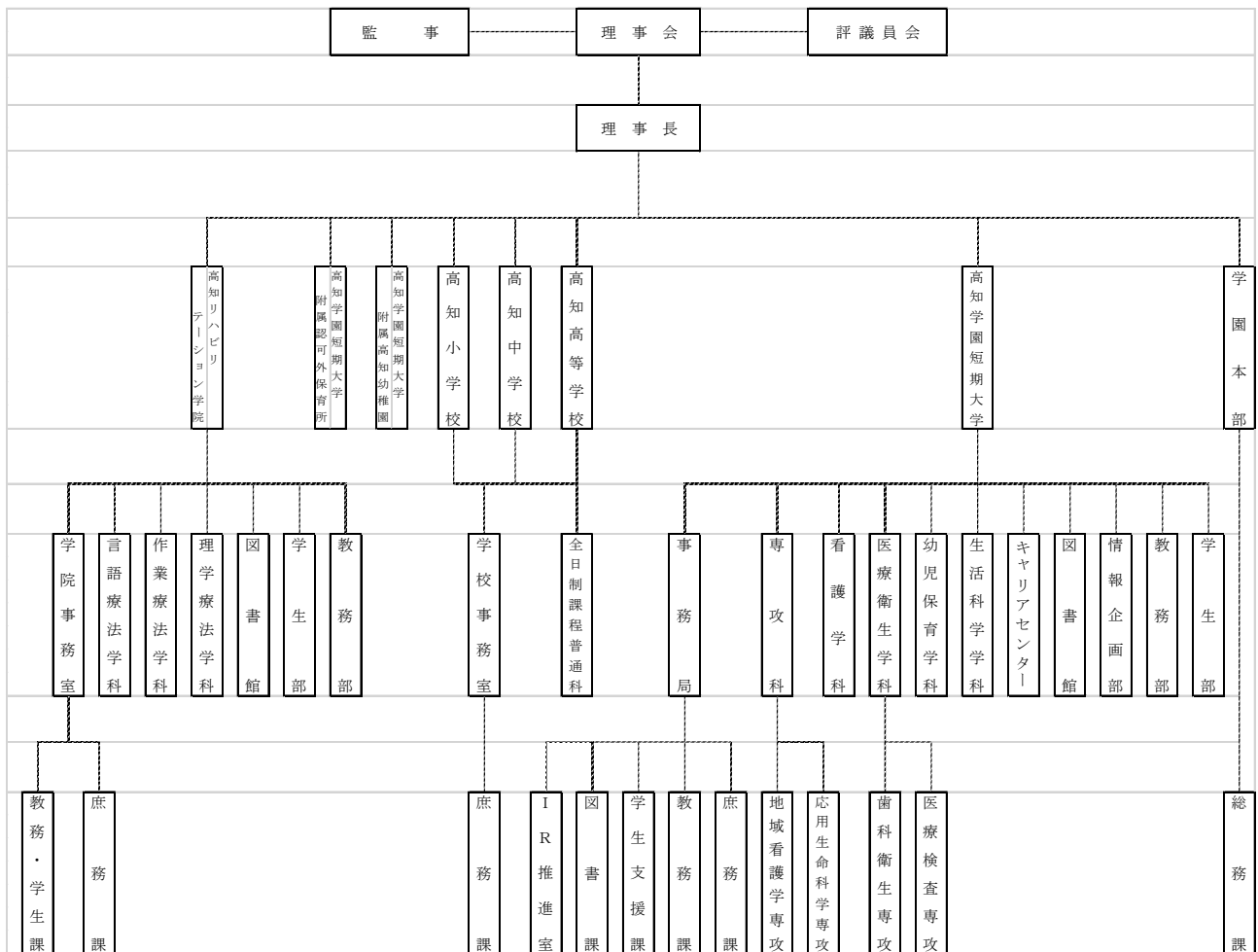
本学園は、明治 32 年、現在の高知市桜井町に創立された「江陽学舎」が前身で、平成 30 年度には創立 119 周年を迎えた。創立者は、独学で漢学や英語を習得された信清権馬（南国市出身）である。

学園の沿革をたどると、大正 8 年に城東商業学校を設置し、昭和 23 年に新教育制度により城東高等学校、城東中学校を設置した。昭和 26 年に川島源司（昭和 37 年に初代学園長に就任）が同高等学校、中学校の学校長に就任され、昭和 27 年には幼稚園を設置した。昭和 31 年には校名を高知高等学校、高知中学校に改称、昭和 32 年に現在地に移転し、同年に小学校を設置して、総合学園としての基礎が確立された。

昭和 42 年に短期大学を、昭和 43 年には私学では全国で最初のリハビリテーション学院を設置、現在では、幼稚園から小学、中学、高校、短大、リハビリテーション学院までの 6 部門で運営し、合わせて 2,694 人の児童、生徒、学生たちが学んでいる。

学校改革の一環として、改正学校教育法で 2019 年 4 月から設置が可能となった専門職大学の設置申請を行い、全国第 1 号の専門職大学として認可を受けた。来年度から、リハビリテーション学院は「高知リハビリテーション専門職大学」として新たなスタートを切ることとなる。

高 知 学 園 組 織 図



[1] 教育方針

幼稚園から短期大学、リハビリテーション学院までを一貫するこの高知学園の教育の基本姿勢に関し、川島学園長は次の如く述べているが、これこそ初代学園長の長期にわたる教育体験に基調し、その念願とするところを思いきり盛り込んだもので、現在、将来を通じての学園憲法の性格を持ち、本学園の明日の盛衰は、この活用の如何によるといえよう。

今後の日本の政治、経済、産業、文化その他のすべての方面のあり方が、世界一環としてのものでなければならぬことは、戦前よりはるかに高度の深さをもつにいたりました。と同時に、科学の急激なる進歩を中心に、今後世界の動きを出来得る範囲に見通し、これにそぐう教育方針でなければならぬと思います。

したがって今後の教育は、日本の長所を認識し、それに立脚すべきであります。由来、日本人には数々の長所がありますが、一面に島国根性に出発した大きな欠陥があり、同時にその日本の中でも別して高知県は他府県に比べて長所、短所が著しいのであります。そのため高知県内の学校教育はこの日本の長所、高知県の長所を伸展すると共に、世界先進国の長所を取り、日本及び高知県の短所を補うことを、教育の出発点としなければなりません。この見地から一面社会道德の向上を計ると共に、一面学科においても科学教育と英語教育に重点をおくべきであると存じます。

国家の興隆と個人の幸福は、教育がその根源でなくてはなりません。本学園におきましては、教育の常道を歩むためしは、如何なることをなすにも、すべて至誠をもって事に当たるという人間修行の根幹の精神を生徒の基本精神としております。至誠をもって事に当たれば必ず(1)「正を行い邪を退ける真の勇氣」と(2)「何事をなすにも、到るところに到らざれば止まざる精神」を生じ、従って「人一度してこれをよくすれば、己はこれを百度し、人十度してこれをよくすれば、己はこれを千度する」との強い精神が生まれ、更に「今日の己は昨日の己に非ず、明日の己は今日の己に非ず」との進取の気性がおのずから湧いてくるのであります。こうした修行を日々生徒が自己の課業ならびに生活を通じて絶えず反復これつとめれば、必ず他人に信頼される人となるでありましょう。この「人に信頼される人物の育成」こそ本学園教育の第一の着眼点であります。

すべて生徒の日々の課業ならびに生活は、生徒の自主性を本体としなくてはならないことはいうまでもありませんが、自主性を尊重すればなおさらに、教師の指導力の強化を必要とし、ここにはじめて真の人物を作り得るのであります。

教育は生徒を中心として、教育者、父兄、卒業生が一丸となって当たらなければ、その真の効果は得られないのであります。しかし、何はともあれ、その根源は教育者自体にあります。生徒をして正道を歩ましめるためには、まず教育者自身が教育の本道を歩まなければなりません。生徒をして自発的に研究し、学習せしめるためには絶えず研究者自身が研究し

なくてはなりません。生徒として健全な精神を養成せしめるためには、教育者が生徒と共に自らの修行を怠ってはなりません。

本学園には短期大学、高等学校、中学校、小学校、幼稚園、リハビリテーション学院の6つがありますが、私立学校は万事において十分に伸び得る可能性を持ち、教育の最高峰を歩むべき使命があります。その使命達成に向かって日々その実績をあげることに努めるべきであります。

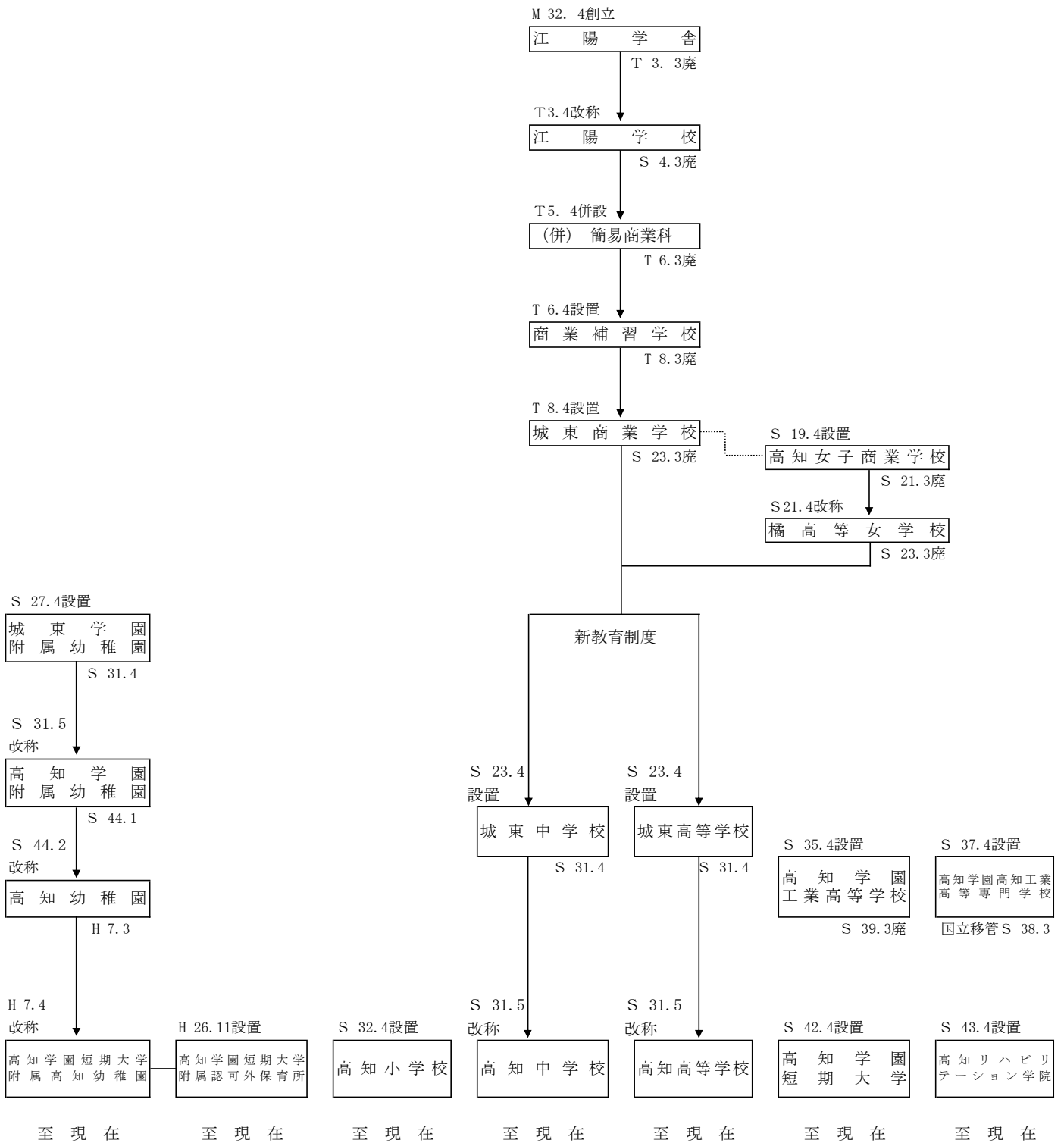
(昭和53年3月12日発行 川島源司伝より)

[2] 学校法人の沿革

法人の 沿革	明治32年 4月	高知市中新町に江陽学舎創立（創立者 信清 権馬）
	明治39年 4月	高知市中新町より北新町84に移転
	大正 3年 4月	江陽学舎を江陽学校と改称
	大正 6年 4月	江陽学校に簡易商業科併設
	大正 7年 4月	簡易商業科を廃止し、商業補習学校設置
	大正 7年12月	乙種商業学校文部大臣認定
	大正 8年 4月	商業補習学校を廃止し、城東商業学校（乙種修業年限3年）設置
	大正10年12月	財団法人城東商業学校設置
	大正15年 3月	城東商業学校を甲種（修業年限5年）に昇格
	昭和 4年 3月	江陽学校廃止
	昭和19年 4月	高知女子商業学校設置
	昭和21年 4月	高知女子商業学校を橘高等女学校と改称
	昭和23年 3月	新教育制度により城東高等学校、城東中学校設置
	昭和26年 3月	財団法人城東高等学校を学校法人城東高等学校に組織変更
	昭和27年 4月	学校法人城東高等学校を学校法人城東学園に組織変更、城東学園附属幼稚園設置
	昭和31年 5月	学校法人城東学園を学校法人高知学園に組織変更、城東高等学校を高知高等学校（普通科、商業科）に、城東中学校を高知中学校に、城東学園附属幼稚園を高知学園附属幼稚園に改称
	昭和31年12月	高知小学校設置
	昭和32年 3月	高知市北新町より高知市北端町100番地に移転
	昭和34年 9月	高知学園附属幼稚園園舎を高知市北新町2の122に移転
	昭和35年 1月	高知学園高知工業高等学校設置
	昭和37年 1月	高知学園高知工業高等専門学校設置
	昭和38年 3月	高知高等学校の商業科廃止 高知学園高知工業高等専門学校廃止（国立高知工業高等専門学校に移管のため）
	昭和39年 3月	高知学園高知工業高等学校廃止
	昭和42年 1月	高知市旭天神町字陣ヶ森292の26に高知学園短期大学設置認可（食物栄養科）
	昭和42年 3月	高知学園短期大学食物栄養科を栄養士養成課程として指定
	昭和43年 2月	高知学園短期大学に衛生技術科設置認可、高知リハビリテーション学院設置認可（各種学校 修業年限3年）
昭和43年 3月	高知学園短期大学食物栄養科を教育職員の免許状授与の所要資格を得させるための課程として認定（中学校教諭二級普通免許（保健・家庭）） 高知リハビリテーション学院を理学療法士及び作業療法士法第11条第1号の規定による理学療法士養成施設として指定	
昭和43年 4月	高知学園短期大学衛生技術科を衛生検査技師養成学校として指定	
昭和44年 2月	高知学園短期大学に幼児教育科設置認可、高知学園短期大学幼児教育科を保育士養成学校として指定、高知学園短期大学幼児教育科を幼稚園教諭二級普通免許を得させるための課程として認定	
昭和45年 1月	高知学園附属幼稚園を高知幼稚園と改称、園舎を高知市北新町より高知市北端町100番地に移転	
昭和45年 1月	高知学園短期大学に保健科設置認可	
昭和45年 2月	高知学園短期大学保健科を教育職員の免許状授与の所要資格を得させるための課程として認定（中学校教諭二級普通免許（保健）、養護教諭二級普通免許）	
昭和45年 4月	高知学園短期大学保健科を歯科衛生士学校養成所指定規則第2条の規定に基づき歯科衛生士養成学校として指定	

法人の 沿革	昭和46年 4月	高知学園短期大学衛生技術科を臨床検査技師学校養成所指定規則第2条の規定に基づき臨床検査技師養成学校として指定
	昭和50年 3月	高知リハビリテーション学院の修業年限3年を4年に変更承認
	昭和53年12月	高知学園短期大学に専攻科設置（幼児教育専攻科修業年限1年）
	昭和55年12月	高知リハビリテーション学院を各種学校から専修学校として認可
	昭和62年12月	高知学園短期大学保健科に保健専攻、歯科衛生専攻設置
	昭和63年 1月	高知学園短期大学保健科保健専攻を教育職員の免許状授与の所要資格を得させるための課程として認定（中学校教諭二種普通免許（保健）、養護教諭二種普通免許）
	昭和63年 3月	高知学園短期大学保健科歯科衛生専攻を歯科衛生士学校養成所指定規則第3条第1項の規定に基づき歯科衛生士学校として指定
	平成 2年 3月	高知学園短期大学食物栄養科、幼児教育科及び保健科保健専攻を教育職員の免許状授与の所要資格を得させるための大学の正規の課程として認定 食物栄養科・中学校教諭二種免許状（家庭）、幼児教育科・幼稚園教諭二種免許状、保健科保健専攻・中学校教諭二種免許状（保健）、養護教諭二種免許状
	平成 5年 4月	高知リハビリテーション学院に作業療法学科設置（理学療法士及び作業療法士法第12条第1号の規定による作業療法士養成施設として指定）
	平成 7年 4月	高知幼稚園を高知学園短期大学附属高知幼稚園と改称
	平成 9年 4月	高知リハビリテーション学院に言語療法学科設置
	平成10年10月	高知リハビリテーション学院校舎を土佐市高岡町乙1139-3に移転
	平成11年 4月	高知リハビリテーション学院言語療法学科を言語聴覚士法第33条第1号及び附則第2条の規定による言語聴覚士養成所として指定
	平成12年 2月	高知学園短期大学幼児教育科及び保健科保健専攻を教育職員の免許状授与の所要資格を習得させるための大学の正規の課程として認定 幼児教育科・幼稚園教諭二種免許状 保健科保健専攻・中学校教諭二種免許状（保健）、養護教諭二種免許状
	平成13年 3月	高知学園短期大学専攻科（幼児教育専攻）廃止
	平成13年 4月	高知学園短期大学専攻科（応用生命科学専攻）設置
	平成17年 4月	高知学園短期大学食物栄養科を生活科学学科に、幼児教育科を幼児保育学科に科名変更
	平成17年12月	高知リハビリテーション学院理学療法学科・作業療法学科・言語療法学科の修了者に対し「高度専門士」の称号を付与することができる学校として指定
	平成18年 3月	高知学園短期大学保健科保健専攻廃止
	平成18年 4月	高知学園短期大学に医療衛生学科設置
	平成19年10月	高知学園短期大学医療衛生学科医療検査専攻、歯科衛生専攻を臨床検査技師、衛生検査技師等に関する法律第15条第1号、歯科衛生士法第12条第1号に定める学校として指定
	平成19年12月	高知学園短期大学看護学科を教育職員の免許状授与の所要資格を得させるための課程として認定 養護教諭二種免許状
	平成20年 3月	高知学園短期大学衛生技術科及び保健科歯科衛生専攻廃止
	平成20年 4月	高知学園短期大学看護学科設置
	平成22年 8月	高知学園短期大学専攻科地域看護学専攻を保健師助産師看護師法第19条第1号に定める学校として指定
	平成23年 2月	高知学園短期大学専攻科地域看護学専攻を教育職員の免許状授与の所要資格を得させるための課程として認定 養護教諭一種免許状
平成23年 4月	高知学園短期大学専攻科地域看護学専攻設置	
平成26年11月	高知学園短期大学附属認可外保育所設置	
平成29年 2月	高知リハビリテーション学院を職業実践専門課程として認定	
平成30年10月	高知リハビリテーション専門職大学設置認可	

学校法人高知学園の沿革



[3] 設置する学校等の状況

高知学園設置学校等

平成30年 5月 1日現在

学 校 名	学 長、校 長、園 長、学院長 及び副学長、部長、館長、室長、教頭	
高知学園短期大学 高知市旭天神町292-26	学 長 学 生 部 長 教 務 部 長 図 書 館 長	小 島 一 久 大 野 由 香 吉 村 芥 子 梶 本 市 子
高知高等学校 高知市北端町100	校 長 副 校 長 教 頭	森 井 曉 全 石 井 全 喜 大 崎 基 喜
高知中学校 高知市北端町100	校 長 副 校 長 教 頭	森 田 中 敏 彦 久 保 明 弘
高知小学校 高知市北端町100	校 長 教 頭	友 村 憲 朗 岡 村 佐 由 紀
高知学園短期大学 附属高知幼稚園 高知市北端町100	園 長	山 本 勝 子
高知リハビリテーション学院 土佐市高岡町乙1139-3	学 院 長 副 学 院 長 (兼) 教 務 部 長 学 生 部 長 図 書 館 長	大 倉 三 洋 濱 田 和 範 清 岡 学 司 山 崎 裕 司
高知学園短期大学 附属認可外保育所 高知市北端町100	所 長	山 本 勝 子

高知学園配置図

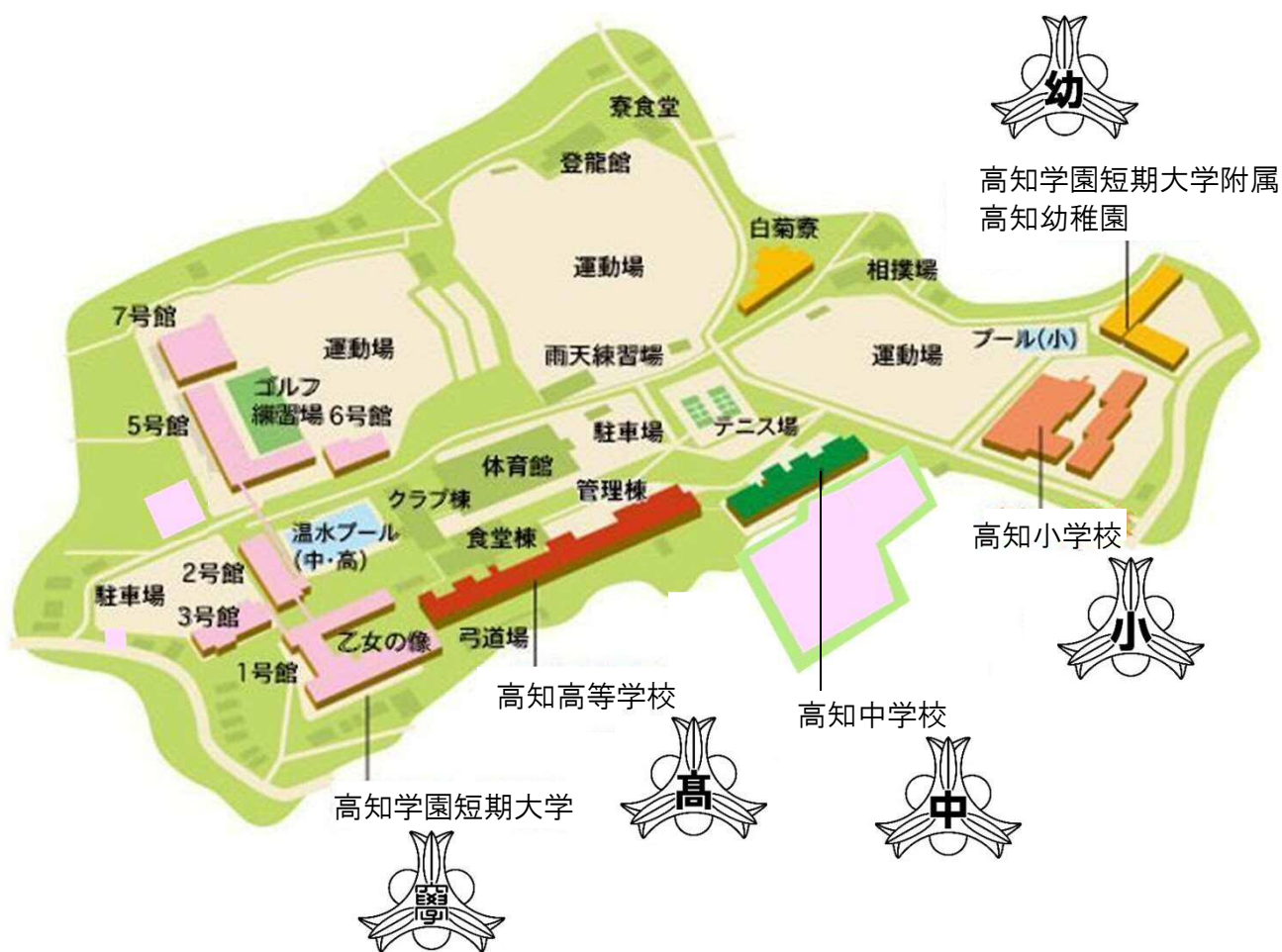
- 高知学園本部
- 高知学園短期大学

【所在地】高知市旭天神町292-26

- 高知高等学校
- 高知中学校
- 高知小学校
- 高知学園短期大学附属高知幼稚園（認可外保育所併設）

【所在地】高知市北端町100番地

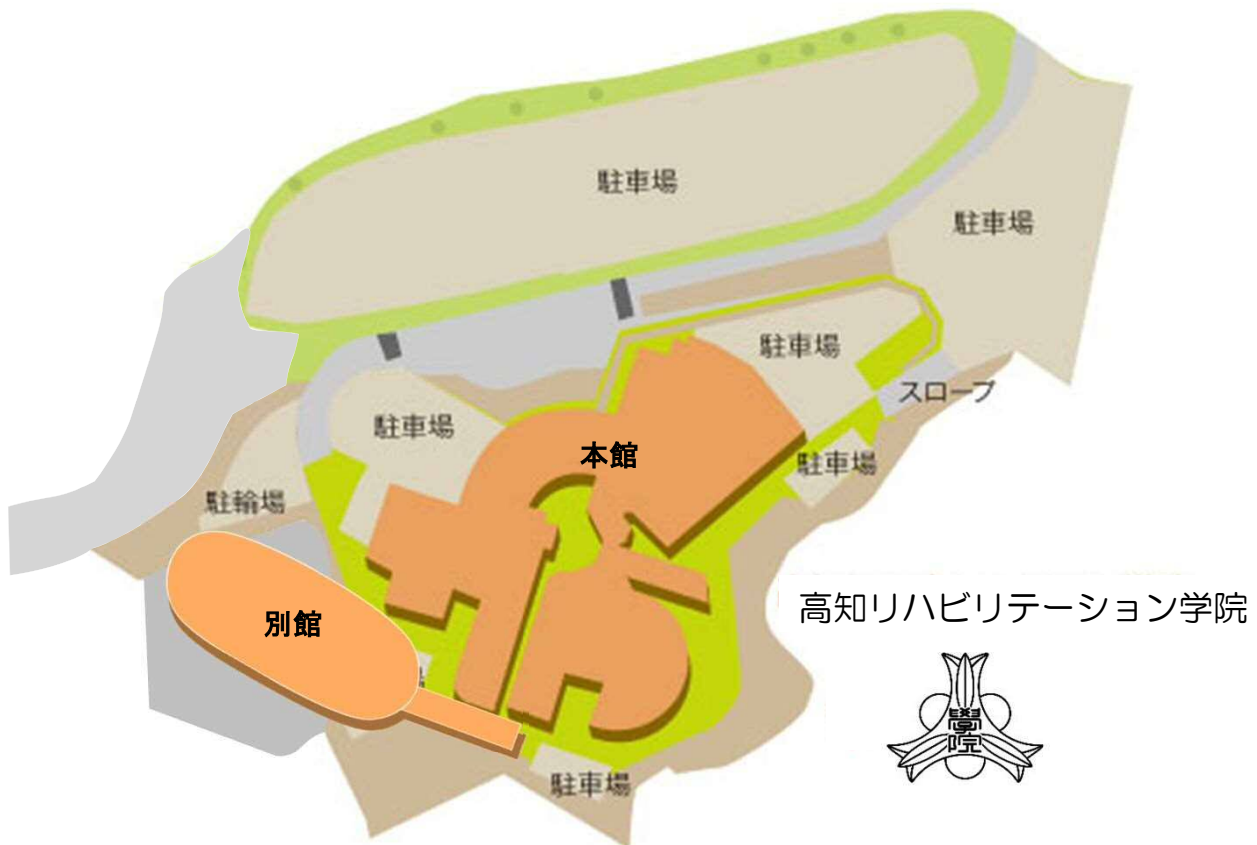
	学校名	校地		校舎	
	(所在地)	現有面積		現有面積	
校地	高知学園本部・高知学園短期大学 (高知市旭天神町292-26)	50,578.98	m ²	15,112.00	m ²
	高知高等学校・高知中学校・高知小学校 (高知市北端町100番地)	87,999.43	m ²	25,765.00	m ²
校舎	高知学園短期大学附属高知幼稚園 (高知市北端町100番地)	1,837.00	m ²	836.00	m ²
	合計	140,415.41	m ²	41,713.00	m ²



● 高知リハビリテーション学院

【所在地】 土佐市高岡町乙1139-3

校地	学校名	校地		校舎	
	(所在地)	現有面積 (借用)		現有面積	
	高知リハビリテーション学院 (土佐市高岡町乙1139-3)	26,353.96	m ²	9,596.12	m ²
	合計	26,353.96	m ²	9,596.12	m ²



[4] 設置する学校等の学生生徒等数の状況

(平成30年5月1日現在)

フリガナ 学校名 (所在地)	学部・学科等名	開 年 設 度	入 学 定 員	入 学 者 数	収 容 定 員	現 員
ガッコウホウジンコウチカクケン 学校法人高知学園 (高知市北端町100)	法人本部	年度 —	人 —	人 —	人 —	人 —
コウチカクケンタンキダクイタク 高知学園短期大学 (高知市旭天神町292-26)	生活科学学科	S 42	80	64	160	125
	幼児保育学科	S 44	80	83	160	167
	医療衛生学科	H 18	80	79	240	235
	医療検査専攻	H 18	40	51	120	144
	歯科衛生専攻	H 18	40	28	120	91
	看護学科	H 20	60	67	180	206
	高知学園短期大学計			300	293	740
コウチコウトウカクッコウ 高知高等学校 (高知市北端町100)	専攻科					
	応用生命科学専攻	H 13	10	11	10	11
	地域看護学専攻	H 23	20	21	20	21
コウチチュウカクッコウ 高知中学校 (高知市北端町100)		S 23	330	116	990	393
コウチショウカクッコウ 高知小学校 (高知市北端町100)		S 32	80	57	480	315
コウチカクケンタンキダクイタクフゾクコウチヨウチエン 高知学園短期大学附属高知幼稚園 (高知市北端町100)		S 27	40	13	120	93
コウチリハビリテーションカククイン 高知リハビリテーション 学院 (土佐市高岡町乙1139-3)	理学療法学科	S 43	70	66	280	248
	作業療法学科	H 5	40	33	160	160
	言語療法学科	H 9	40	19	160	108
	計			150	118	600
コウチカクケンタンキダクイタクフゾクケンカクイタイショ 高知学園短期大学附属認可外保育所 (高知市北端町100)		H 26	15	10	15	10
合 計			1,365	834	4,235	2,694

[5] 役員・評議員の概要

(1) 歴代理事長

氏 名	在 任 期 間
橋 田 早 苗	大正10年 12月 ~
山 本 忠 秀	~ 昭和11年 10月
中 島 和 三	昭和11年 10月 ~ " 18年 5月
川 島 正 件	" 18年 6月 ~ " 23年 11月
坂 本 重 寿	" 23年 12月 ~ " 38年 4月
(代) 井 上 重 陽	" 38年 5月 ~ " 40年 2月
藤 田 三 郎	" 40年 3月 ~ " 46年 1月
川 島 源 司	" 46年 1月 ~ " 51年 3月
藤 本 孟	" 51年 4月 ~ " 55年 7月
岡 林 濯 水	" 55年 7月 ~ " 62年 4月
汲 田 精 一	" 62年 4月 ~ 平成元年 5月
竹 内 明 義	平成元年 6月 ~ " 10年 8月
西 野 恭 正	" 10年 8月 ~ " 16年 4月
(代) 下 山 晃	" 16年 4月 ~ " 16年 8月
成 田 十 次 郎	" 16年 8月 ~ " 20年 8月
小 笠 原 俊 明	" 20年 8月 ~ " 26年 8月
吉 良 正 人	" 26年 8月 ~ 至現在

注(代)は、理事長代理

(2) 歴代学園長

氏 名	在 任 期 間
川 島 源 司	昭和37年 4月 ~ 昭和46年 3月
高 石 次 郎	" 46年 4月 ~ " 49年 3月
山 崎 重 明	" 49年 4月 ~ " 51年 3月

昭和51年4月 学園長の職制廃止

(3) 役員・評議員の氏名等

① 役員

(平成31年3月31日現在)

理事	定数	10人	任期	2年※ (※1号理事及び2号理事を除く)	選任条項別定数実数		(注)選任区分の各号は寄附行為第6条第1項の各号	
					区分	定数		実数
実数	常勤	5人	1	2	2	2		
	非常勤	5人						
	計	10人						
	うち外部理事	5人						
監事	定数	2人	2	年	4	4		
	実数	常勤						0人
	非常勤	2人						
	計	2人						
うち外部監事	2人							
理事・監事の區別	職名又は担当職務	代表権の範囲	氏名	常勤・非常勤の別	就任年月日 (重任年月日)	選任区分等 項又は号	選任区分	
理事	理事長	法人の全ての業務	吉良正人	常勤	H14.3.1 (H30.8.31)	3号	評議員 (理事会選任)	
〃	—	—	小島一久	〃	H26.4.1 (H29.4.1)	1号	学校長の互選	
〃	—	—	森 曉	〃	H25.4.1 (H28.4.1)	1号	〃	
〃	—	—	東好男	〃	H26.8.31 (H30.8.31)	2号	学園本部長	
〃	—	—	上岡義隆	非常勤	H26.8.31 (H30.8.31)	3号	評議員 (理事会選任)	
〃	—	—	大倉三洋	常勤	H22.4.1 (H30.8.31)	3号	〃	
〃	—	—	細木秀美	非常勤	H20.8.31 (H30.8.31)	4号	学識経験者 (理事会選任)	
〃	—	—	竹内康雄	〃	H18.8.31 (H30.8.31)	4号	〃	
〃	—	—	田中正澄	〃	H28.8.31 (H30.8.31)	4号	〃	
〃	—	—	大島仁	〃	H27.10.16 (H30.8.31)	4号	〃	
監事	監事		行田博文	非常勤	H18.8.31 (H30.8.31)	—	—	
〃	〃		高瀬久志	〃	H14.8.31 (H30.8.31)	—	—	

② 評 議 員

定数 実数 任期	21 人 21 人 2 年	(注) 選任区分の各号 は寄附行為第24条第1 項の各号	選 任 条 項 別 定 数 実 数		
			区分	定数	実数
			号	人	人
			1	3	3
			2	6	6
			3	5	5
			4	3	3
			5	4	4
氏 名	就 任		選 任 区 分 等		
	就任年月日	重任年月日	項又は号	選任区分	
大倉 三洋	H22. 4. 1	H30. 8. 31	1号	法人職員 (理事会選任)	
山本 勝子	H17. 5. 27	H30. 8. 31	1号	〃	
友村 憲朗	H29. 5. 31	H30. 8. 31	1号	〃	
吉良 正人	H14. 3. 1	H30. 8. 31	2号	法人設置学校卒業者 (理事会選任)	
秋山 保之	H26. 8. 31	H30. 8. 31	2号	〃	
山地 好市	H23. 6. 2	H30. 8. 31	2号	〃	
野々村 雅代	H22. 8. 31	H30. 8. 31	2号	〃	
西森 美恵	H28. 8. 31	H30. 8. 31	2号	〃	
北川 眞智子	H26. 8. 31	H30. 8. 31	2号	〃	
細木 秀美	H20. 8. 31	H30. 8. 31	3号	理事の互選	
大島 仁	H27. 10. 16	H30. 8. 31	3号	〃	
小島 一久	H26. 5. 29	H30. 8. 31	3号	〃	
森 暁	H25. 5. 31	H30. 8. 31	3号	〃	
東 好男	H26. 8. 31	H30. 8. 31	3号	〃	
渡邊 基文	H28. 8. 31	H30. 8. 31	4号	在学生の父母若しくは保 護者 (理事会選任)	
市村 瑞也	H29. 5. 31	H30. 8. 31	4号	〃	
細川 洋伸	H26. 5. 29	H30. 8. 31	4号	〃	
上岡 義隆	H20. 8. 31	H30. 8. 31	5号	学識経験者 (理事会選任)	
竹内 康雄	H18. 8. 31	H30. 8. 31	5号	〃	
田中 正澄	H28. 8. 31	H30. 8. 31	5号	〃	
竹村 彰夫	H18. 8. 31	H30. 8. 31	5号	〃	

(4) 理事会・評議員会の開催状況

・理事会

第1回	平成 30 年 5 月 29 日
第2回	平成 30 年 8 月 30 日
第3回	平成 30 年 10 月 10 日
第4回	平成 31 年 2 月 7 日
第5回	平成 31 年 3 月 20 日

・評議員会

第1回	平成 30 年 5 月 29 日
第2回	平成 30 年 8 月 30 日
第3回	平成 30 年 10 月 10 日
第4回	平成 31 年 2 月 7 日
第5回	平成 31 年 3 月 20 日

[6] 教職員の概要

平成 30 年 5 月 1 日現在

学校名	教 員		職 員		合 計
	専 任	兼 任	専 任	兼 任	
学 園 本 部	0	0	6	3	9
高知学園短期大学	59	122	15	10	206
高知高等学校	41	14	3	11	69
高知中学校	29	5	2	1	37
高知小学校	17	7	1	6	31
高知学園短期大学 附属高知幼稚園	5	8	0	4	17
高知リハビリ テーション学院	30	91	9	17	147
高知学園短期大学 附属認可外保育所	0	1	0	0	1
合 計	181	248	36	52	517

II 設置学校の事業報告

[1] 高知学園短期大学

1 事業の概要

「世界の鐘」の呼びかける平和と友愛の精神を柱とし、自由と規律を尊び、真理を深め、創造性と情操を培い、広い教養と健全な社会性を身につけた短期大学士の学位を有する専門的職業人を育成するという本学の基本方針のもと、本年度は、15 項目の重点目標を定め、その達成のため取り組んだ。その主なものは、

- (1) 入学者の確保に向けた効果的な施策の実施
- (2) 生涯学び続ける力の育成及び、キャリア形成教育の充実
- (3) 大学教育の入口から出口に至る教育の充実（ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーの徹底）
- (4) 国家試験対策等の充実
- (5) 教職員の資質指導力の向上及び、教職員の協働体制の確立
- (6) 地域社会に貢献する人材づくり
- (7) 入学者のオリエンテーションの充実
- (8) FD・SD の活性化
- (9) 施設設備の充実
- (10) 短期大学の中長期的な将来構想についての具体化
- (11) 震災対策等危機管理体制の充実
- (12) 高等教育機関（大学・短大・高専）との連携強化

2 事業の実績

- (1) 入学者の確保に向けた取組みでは、学生支援課と入学試験募集委員会との有機的な連携のもと教職員の協働体制により事業を展開した。年間行事計画により、積極的な広報活動を行っている。年間 4 回開催のオープンキャンパスでは年度毎にテーマを掲げ、それに沿って各学科・専攻で企画検討し内容の充実を図る工夫、時期を見極めた効果的な学校訪問、教職員が担当する高校での講演活動や説明会、高校の行事への積極的な参加等を通じて本学の理解啓発に努めた。

入学者は、本科 264 名、専攻科は、応用生命科学専攻 12 名、専攻科地域看護学専攻 19 名の入学者となり、昨年より 30 名減の 295 名となった。定員割れの学科があり、次年度に向けてさらに対策が必要である。

- (2) 本学学生のキャリア形成は、必要不可欠であることから、平成 28 年度から全学科で実施している。本学で作製したキャリアノートの活用、キャリア形成セミナーの開催や就活講座、学生のマナー指導等に積極的に取組み充実を図っている。また、各学科が中心となって、卒業生を講師に招いての「ようこそ先輩」を開催・拡充を図り学生の将来の生き方や職に対する意識を高めるなど各学科の特色を生かしたキャリア形成に効果的であった。
- (3) 大学教育の入口から出口に至る教育の充実を図るため、本学の方針としてディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）、カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）、

アドミッション・ポリシー（入学者受け入れの方針）を学内及び学外に明示し、その方針に沿った教育の実践に努めた。

- (4) 国家試験対策では、本来の授業の充実と補習活動の充実を図り各学科（医療衛生学科医療検査専攻及び歯科衛生専攻、看護学科、専攻科地域看護学専攻）とも 100%を目指し取り組んだ。各試験ともに一定の向上がみられるが全国平均を少し上回る状況であり、全学科 100%の目標は達成できず、さらにきめ細かな指導対策を実施する必要がある。（別表参照）
- (5) 教職員の指導力向上及び、教職員の協働体制の確立。
- (6) 高知県の三大学、学園短大、高知高専の高等教育機関と産業界で構成する産学官民連携センターの活動に積極的に参画するとともに地域貢献に関する事業の取り組みを進めてきた。これまで幼稚園・小学校・中学校・高等学校で実施してきた健康教育も継続拡充している。また昨年引き続き旭地域の高齢者を対象として、健康に対する意識の醸成や地域の方々の本学に対する理解を得ることを目的として各学科・専攻の特色を生かした「いきいき健康フェア」を開催し旭地域だけでなく、広域からの参加を得て好評を博した。今後更なる地域貢献が期待されている。
- (7) 入学者に対して高等学校と大学との段差を解消するため、オリエンテーションで大学生活の心構え、学業に臨む姿勢や態度等について丁寧に説明し、円滑に大学生活に入れるよう指導を行った。
- (8) 「四国地区大学教職員能力開発ネットワーク」の活用による教職員の資質・指導力の向上に関しては、学内の研究授業の実施（年間 11 回）、授業評価のためのアンケートの実施や講演会（FD・SD 共同）の実施、愛媛大学等の主催する研究会・フォーラムへの参加を通じて所期の目的達成の努力を継続した。
また、本年度は FD・SD 活動研究発表会を新たに実施するとともに、年間の活動をまとめた「高知学園短期大学 FD・SD 活動報告書」を昨年度から作成するなど、より積極的な取り組みが実施できた。
- (9) 学習効果向上のための施設・設備の充実では老朽化した施設設備の改修に積極的に取り組み学習環境の整備を努めた。また、新 4 年制大学の施設、設備の整備計画をたてている
- (10) 短大の将来構想については、令和 2 年 4 月開学に向けて申請中。
- (11) 震災対策等は、震災対策委員会を中心に学生・教職員の防災意識の強化を図るための防災講演会、防災訓練を実施している。また学内の防災設備の点検や、防災機器備品等の整備も計画的に行っている。学生・教職員が必携としている防災マニュアルについても毎年更新し充実を図っている。
- (12) 県内高等教育機関の学長・校長で「高知學長会議」を組織し高等教育機関としての教育や地域に貢献する人材づくり、各校の所有する施設設備の共同利用、災害時の連携、更には各大学における禁煙対策や部活動のあり方等について意見交換会を行っている。今後も更に連携し充実した教育環境の確保に努める。

3 募集活動

(1) 入学者選考

昨年度と同様に 9 月の特別推薦選考から 3 月の試験選考 B までの 6 種類の選考と社会人選考 3 回、専攻科 2 回の選考を予定どおり実施できた。

(2) オープンキャンパス

30年度は6月から9月にかけて4回実施した。オープンキャンパスが受験者増に直接繋がることから、積極的に広報活動を展開するとともに保護者を対象にした保護者のための講座を設ける等、内容の充実に更なる努力を行い参加者の増加に努めた。その結果、参加生徒1,039名(76名増)、参加保護者368名(31名増)、全体では1,407名(107名増)の参加を得た。近年は保護者の参加が増えている。

(3) 高校訪問等

本学の学生募集入試委員会の教員と本学の学生支援課担当職員の協働体制により効果的な高校訪問、高校主催の説明会、高校の学校行事や講演等積極的に参加し、高校と本学の信頼関係を構築しながら募集活動を展開した。また本学主催の高校教員を対象とした入試説明会を本学で実施し、多くの教員の参加を得た。更に27年度からは、県外実施する進学説明会等へも参加している。

(4) 高校の進路指導に関する授業等

各高校の主催する進路指導講座やキャリア形成講演会に参加し、直接高校生に授業を行う模擬授業の機会の増加やPTA活動の一環として保護者を対象に行われる説明会にも講師として招聘される頻度も増加し、生徒・保護者両面の対策を実施した。

(5) 高知高校との連携

フェローシップによる対策を実施するために高校との連携を密にし、高知高校の2年生は授業見学とオープンキャンパスへの参加、3年生は授業参加及びオープンキャンパスの参加等を行い、本学に対する理解を深めるとともに進学意欲を高めることに努めた。

(6) 広報計画実績

本県に対する卒業生の貢献度や就職率の高さを強調し「社会にいちばん近い大学」としてのイメージづくりに努めるとともに、高校生の目線でのアピールを目的として「より高く、より深く。」のキャッチコピーを加えて本学の特色を強調してきた。新聞、テレビ、ラジオ等の広報活動は予算内でより効果的に展開できた。

(7) 募集実績

平成31年度募集実績

学科・専攻	出願者	合格者	入学者
生活科学学科	52	52	46
幼児保育学科	82	80	76
医療衛生学科 医療検査専攻	53	46	38
医療衛生学科 歯科衛生専攻	40	39	37
看護学科	126	71	67
専攻科応用生命科学専攻	12	12	12
専攻科地域看護学専攻	28	21	19
合計	393	321	295

4 進路指導実績

(1) 就職指導

各学科の就職委員と学生支援課、キャリアセンターの緊密な連携による学生指導やキャリア形成セミナー等の講演活動による意識の向上、就職資料の充実、IT関連の整備等を通じて、

学生達の職業意識の高揚を図り、学生が積極的に就職活動に取り組む姿勢が向上した。

また、求人開拓も行うなど就職希望者全員の就職に向けて努力を重ねた。その結果、10年連続しての100%の就職率となった。

(2) 進学指導

本学の専攻科への進学者29名、他大学への進学者は2名。

(3) 平成30年度卒業生の進路状況

学科・卒業生数	職種	業種	就職者数	備考			
生活科学学科	栄養士	病院等	7	進学 : 0 その他 : 6 家庭 : 0			
		学校給食等	6				
		集団給食等	22				
	教員	栄養教諭	9				
	事務職員等	一般企業等	2				
		医療事務	0				
	上記以外		6				
卒業生数	58	就職希望者数	52	就職決定者数	52	就職率	100%
幼児保育学科	保育士	保育園等	67	進学 : 1			
	教員	幼稚園	6	その他 : 5			
	事務職員等	一般企業等	2	家庭 : 1			
	上記以外		2				
卒業生数	84	就職希望者数	77	就職決定者数	77	就職率	100%
医療衛生学科 医療検査専攻	臨床検査技師	病院等	13	進学 : 13			
		検査センター	8	その他 : 5			
		上記以外	0	家庭 : 0			
卒業生数	39	就職希望者数	21	就職決定者数	21	就職率	100%
医療衛生学科 歯科衛生専攻	歯科衛生士	歯科医院	26	進学 : 0			
		病院	1	その他 : 0			
	上記以外		0	家庭 : 3			
卒業生数	30	就職希望者数	27	就職決定者数	27	就職率	100%
看護学科	看護師	病院	30	進学 : 17			
	教員	学校等	0	その他 : 5			
	上記以外		1	家庭 : 1			
卒業生数	54	就職希望者数	31	就職決定者数	31	就職率	100%
合計 卒業生数	265	就職希望者数	208	就職決定者数	208	就職率	100%
専攻科 応用生命科学専攻	臨床検査技師	病院等	11	進学 : 0			
		検査センター	0	家庭 : 0			
修了者数	11	就職希望者数	11	就職決定者数	11	就職率	100%
専攻科 地域看護学専攻	看護師	病院	17	進学 : 0			
		施設等	0	その他 : 0			
	保健師		3	家庭 : 0			
	教員	学校	0				
修了者数	20	就職希望者	20	就職決定者	20	就職率	100%
総計						進学 : 31 その他 : 21 家庭 : 5	
卒業(修了)者 合計数	296	就職希望者数	239	就職決定者数	239	就職率	100%

*備考のその他とは、専門学校・各種学校・職業訓練入学。科目等履修生・卒後研修生。

5 人事計画実績

- (1) 平成 30 年度の専任教員は、平成 29 年度と同様の 59 名となった。
兼任教員は、143 名となった。
- (2) 専任職員は、17 名となった。

6 教育研究実績

(1) 生活科学学科

1) 教育実績

- ① 食・栄養・健康に関わる理論と技術を多様な講義や実習、演習を通じて、きめ細かに指導し習得させるとともに、食・栄養に関わる医学的知識を備えた栄養士を育成するために、各教員は自己研鑽に努め、授業・実習・実験の工夫と改善を行った。
- ② 調理学実習では、実技試験を実施するが、その内容については合格者登校日に課題として説明をおこない、入学前から個々の調理技術向上を図った。また、授業以外にも別途補講によりスキルアップに努めた。臨床栄養学実習では、大量調理実習室を活用して病院食における治療食の大量調理を体験する授業に変更し、実践力を身に付けた。
- ③ 学外実習にむけての実践力、応用力を習得する目的で、7月10日に「栄養士・管理栄養士倫理綱領」朗読と旭光徽章の授与による「飛翔式」を執り行い、実習に臨む姿勢と意識を高めた。
- ④ キャリア形成、就職活動の一環として、に生活科学学科2年生を対象に第2回就職合同説明会を開催した(5月21日)。参加企業は12社(委託10、直営2)で19名の参加があり、栄養士採用のニーズが高いことがわかり、学生は直接企業から業務内容等を聞くことでより良い就職活動の場となった。
- ⑤ 栄養士実力認定試験(主催:一般社団法人全国栄養士養成施設協会)を実施した(12月9日)。昨年同様6割の基準点に達していない学生には模擬試験の再試験、試験、再々々試験を実施し知識の習得を強化した。その結果、認定証Aの学生の割合が増加し、初めて短期大学における全国平均点を上回る結果となった。
- ⑥ 高知県公立学校教員採用候補者選考審査(栄養教諭)を受験する学生への受験対策として、6月の試験までに2月から集中講義として、栄養教諭採用審査対策講座を実施した。合格には至らなかったが、学生のやる気や学ぶ意欲の向上につながり、9名が臨時教員として着任することとなった。
- ⑦ 在学生および卒業生を対象に国家試験準備講座を開催し、それぞれの専門科目担当の教員により管理栄養士、管理栄養士受験対策を行った。
- ⑧ イキイキ健康フェア(3月27日)に、生活科学学科では、高齢期の健康についてフードモデルを使って昼食を再現してもらい、食育SATによる栄養相談を実施した。また、土佐茶とお菓子の提供も併せて実施した。学生6名、教員7名が参加した。
- ⑨ 2生が主体となって1年生を歓迎するHLS Welcome Partyを開催した(4月23日)。授業や大学生活について1年生が2年生に相談でき、2年生からはアドバイスがしやすいなど学生間のきっかけづくりの場として効果的であった。

- ⑩ 高知県産業振興センター主催の第7回ものづくり総合技術展が11月15日から17日に、高知ちばさんセンターで開催され、本学科から学生が主体となって教員と「ものづくり教室」に参加した。未就学児から小学校低学年を対象に、箸置き・バランスランチマット作りの体験コーナーを企画し実施した。子供から成人まで100名を超す参加者があり、ものづくりを通して「食」を考える体験の場となり、学生も栄養の専門職として認識を高める良い機会となった。
- ⑪ 29年度に引き続き、行政と民間企業の有志による「土佐茶プロジェクト」に本学科の学生が土佐茶ガールズとして参加し、土佐の豊穰祭や新茶まつりなどで土佐茶の普及活動を行った。また、キャリア形成演習の一環として、11月29日に土佐茶特別セミナーを開講し、生活科学学科一年生が参加した。

2) 研究実績

平成30年度は、著書(2編)、論文(1編)、学会発表(9編)、その他講演など(19編)を行い、それぞれ教員の質の向上に努める研究活動を行った。

(2) 幼児保育学科

1) 教育実績

- ① 本学科が定めた教育課程編成・実施の方針に基づいて、教員の共通認識を図り教育課程の改善及び工夫を行い、教育の質的向上に向けた授業改善に取り組んだことにより、一定の学習成果を収めた。
- ② 本学科が定めた学位授与の方針に基づき、卒業生全員が幼稚園教諭二種免許状と保育士資格を取得することに努めたが、平成30年度卒業生84名中77名は両方、6名は保育士資格のみ、1名はいずれの資格も取得しないという結果となった。
- ③ 本学科が定めた入学者受け入れの方針と学習成果の獲得との関連に基づいて、学習活動や学校生活全般の在り方とその指導体制を検証し、全学生が学習成果獲得を実現できるよう、教員の教育力や実践力に努めた。学生の適切な学習時間の確保に向けては、多少課題が残ったが、学習成果においては一定のレベルを保つことができた。
- ④ 学生への職域に対する認識を深めるための教員免許状授与式については、職業倫理に対する意識を高め、自覚と責任感を培うことに役立った。

2) 研究実績

平成30年度は、学会発表2件、研究紀要投稿2件、ニュースレター執筆1件、講演2件となった。紀要の1件については、学科教員の共同研究によるものである。また、前年度から引き続いて共同研究で取り組んでいる「保育者養成課程における学習成果の振り返りと卒業後の取り組み状況との関係」の分析考察については、学科行事の「異学年交流会」の取り組みとともに、本学のFSDS活動において発表した。

SPOD(四国地区大学教職員能力開発ネットワークフォーラム2018)においては、ポスター発表の部で優秀ポスター賞を受賞した。

(3) 医療衛生学科

(3-1) 医療検査専攻

1) 教育実績

- ① 学内教育において実践力をもった臨床検査技師を育成するために各教員が教材の開発と教育の工夫に努めた。また、臨床施設の協力のもと病院見学実習（1年次）、夏期体験実習（2年次）、臨地実習（3年次必修）を実施した。さらに高知県臨床検査技師会と連携した学生支援活動（2年次）を2回開催したほか各種研修会への参加を推奨した。
- ② 在学中に取得できる各種資格についても受験を勧め、その対策のための補習や模擬試験等を実施した。その結果、健康食品管理士認定試験（3年次）は合格者22名（75.9%）、中級バイオ技術者認定試験（2年次）は合格者17名（56.8%）であった。
- ③ 臨床検査技師の専門化・高度化への対応として学生の進学を支援した結果、専攻科応用生命科学専攻に12名が進学し、大学編入者が1名（徳島大学医学部保健学科）であった。
- ④ 学生のモチベーションを高めるために、医療検査専攻の全学生が参加するキャリア形成事業を開催した。宣誓式（4月）、臨地実習報告会（9月）、在学生オリエンテーションの中で「先輩からのアドバイス」・「これからの臨床検査技師に求められるもの」と題した講演会（3月）を実施した。また応用生命科学専攻の修了研究発表会（前期・後期）にも全学生が参加した。さらに、第51回中国四国医学検査学会（高松市）において開催された学生フォーラム（11月）に参加するなど学外行事にも活動を広げた。
- ⑤ 学習成果を高めるために、教員がFD活動に積極的に参加し、独自のテキスト作成、ルーブリック評価の導入、アクティブラーニングなど可能なものを授業に取り入れ改善に努めた。また、第2回高知学園短期大学FD・SD活動研究発表会（8月）で学生を主体とした発表形式の授業について本専攻の取組を発表した。
- ⑥ リレー・フォー・ライフ、歯っぴいスマイルフェア、骨髄移植推進事業、子宮頸がん予防・啓発キャンペーン、検査と健康展、健康食品の適切な利用の啓蒙、自治体病院の健康フェアなどの学外活動に参加し、健康・医療分野で学生と共に社会貢献した。
- ⑦ 5回目となる体験実習「臨床検査をのぞいてみよう！」を実施し（3月）、高校生56名の参加があり、事業を通して高校生に臨床検査技師の職業について理解を広めた。
- ⑧ 医療検査専攻開設50周年記念講演会を「臨床検査の近未来」と題して企画し、「私達が築いた臨床検査の歴史と私の夢」、「今後の臨床検査で期待されること」の2講演を実施した（12月）。

2) 研究実績

- ① 医療検査専攻教員の研究業績は延べ、著書1編、学術論文4編、学会発表6題、その他8件であった。
- ② 研究活動の活性化を図るため医療検査専攻研究セミナーを3月に開催した。
- ③ 外部資金獲得については日本学術振興会科学研究費助成事業へ3名が応募し、1名が研究費（若手研究）を獲得することができた。

(3-2) 歯科衛生専攻

1) 教育実績

- ① 1年生の段階から主体的な学びとなるよう1年生から3年生の縦割りのグループを作り、「健康教育」の授業である歯みがき指導実習に参加した。また、この授業を通して、

幼児・児童・生徒等への年齢層にあった対応等、学習効果がみられた。指導施設数および対象人数は幼稚園・保育園（18園418名）小学校（33校2,169名）中学校（9校826名）特別支援学校（2校74名）であった。また、歯と口の健康週間行事では、高知市・高知市歯科医師会主催の「歯っぴいスマイルフェア2018」に3年生は「手形コーナー」2年生は「ステージイベント」として各班で作成した媒体を用いて歯みがき習慣の啓発事業を展開した。

- ② 医療人としての倫理観や人間性そして専門的知識の指導の充実については、1年次には授業を通して職域の異なった先輩歯科衛生士の話を受講し2年次では継承式の目的を踏まえて実習に臨み、3年次には臨床・臨地実習を通して幅広い知識を吸収することに繋がった。
- ③ 歯科臨床実習においては、事前に高知県歯科医師会と意見交換会を開催し、実習の基本方針等の連携を強化した。
- ④ キャリア形成教育の一環として実施した「就職フェア」では、38歯科医院74名の参加のもと実施され、「求める歯科衛生士像」「歯科医院の診療方針」などについて面談を行い、学生の意識の高揚となった。
- ⑤ 全学科の取組みである「健康教育演習Ⅰ」では、本学附属幼稚園において歯みがき指導、「健康教育演習Ⅱ」および「イキイキ健康フェア」では高齢者を対象に口腔体操などを通して他学科と連携し、口腔衛生の必要性、口腔機能の向上を共有した。また、実践を行うことにより各年齢にあったコミュニケーションスキルをアップすることに繋がった。また、企業の健康まつりに参加し、口腔衛生の普及向上を図った。
- ⑥ 本年度においては学生の参加はなかったが教員がアイデアソンの企画検討会議に出席、その後歯科関係企業に出向き、歯科技工過程を見学し、生涯学習の意義に繋がった。

2) 研究実績

- ① 高知学園短期大学紀要第49号に歯科衛生専攻の教員の専門とする内容を分担し投稿した。
- ② 外部資金取得に向けては、「科学研究費助成事業セミナー」を受講し、次年度に向けての意欲の向上に努めた。
- ③ 本年度は北京大学口腔医学院で2名の教員が講演を行い交流を図った。

(4) 看護学科

1) 教育実績

- ① 学習成果を意識した教育効果の向上に向けた教育課程の検討および各教員の授業内容の見直しを行う。

↓

今年度はカリキュラム改正ワーキンググループを立ち上げ、学習成果が獲得できるような教育課程のあり方について検討した。現状の課題分析を行い、学ぶ意欲の喚起と継続、論理的思考力の強化、社会のニーズを反映させることをめざした教育課程の改正を行った。

また、看護師国家試験終了後には本学の問題の正答率や試験内容や傾向を分析し、各教員が担当する科目について学習成果につながるような授業や演習・実習の振り返りを

行った。

- ② 臨地実習における各領域間の連携を見直し、学生個々の体験が効果的な学びにつながるよう、実習内容の検討を行う。

↓

今年度は実習内容検討ワーキンググループを立ち上げ、1年次から3年次までの縦断的つながり、あるいは領域間の横断的つながりの検討を行い、実習目的・目標について学年進行表を作成した。さらに、次年度に向けて個人情報の保護を強化した実習記録の内容及び取り扱い方法について検討を行った。

- ③ 臨地実習施設の継続的な確保のために、実習における具体的な学習成果を提示しながら、実習施設連絡調整会議及び各施設における実習指導者連絡会の効果的な運営を行い、相互理解に基づいた実習施設との信頼関係の強化を図る。

↓

実習施設連絡調整会議は、平成30年11月28日に本学にて実習施設11施設14名、看護学科教員13名の参加のもと実施した。本学からは学科における教育上の課題への取り組み(リメディアル教育やポートフォリオの作成、カリキュラム改正、実習内容検討ワーキンググループでの検討)について説明した。臨床側の参加者からは、本学卒業生の印象や具体的な現場での成長など、概ね良い評価を得ている。実習に関しても、教員との連携やカンファレンスの持ち方等、改善点について対応しやすくなったとの評価を得た。

実習指導者連絡会は、高知医療センター(臨地実習説明会:平成30年4月12日、臨地実習日程調整会:11月6日、実習連絡会平成31年2月5日)、高知県立あき総合病院(実習連絡会:6月11日)、JA高知病院(実習打ち合わせ会:9月10日)、高知赤十字病院(5校会:9月7日)、近森病院(実習打ち合わせ会:9月7日)に出席した。

病院における看護体制がパートナーシップナーシングに移行するなかでの看護実習の在り方や、学生の主体性を育てるための効果的な実習指導の方法などについて意見交換を行った。

さらに、実習終了後は各施設において実習反省会を実施し、実習内容や感染症対策の新たな取り組みについて次年度に向けての検討を行った。

- ④ 臨床講師の量的充実を図るとともに、意見交換会を開催し、臨地実習に関する指導体制の一層の充実を図り、臨地実習の質の保証に努める。

↓

臨床講師との意見交換会を年2回実施した。第1回は9月26日に臨床講師5名、看護学科教員12名の参加、第2回は3月20日に臨床講師5名、看護学科教員12名が参加した。記録物の改善効果や学生の基本的なコミュニケーション力の不足への対応、学生の未熟性への指導の臨床講師の困難感などについて意見交換がなされた。また、実習中の南海トラフ巨大地震発生時の対応について、マニュアル作成への要望が出され、今後検討していく予定である。

- ⑤ 「戴帽式」や「ようこそ先輩」「生涯学習」などの事業と授業を連動させた、入学前から卒業後まで視野に入れた看護専門職としてのキャリア形成支援の充実を図る。

↓

合格者登校日では、入学前からキャリア形成を意識できるよう、自身の未来のために入学後の 3 年間で何をなすべきかについてのオリエンテーションを行った。そして、入学後の看護学の学習につながるよう、必要性や意図を説明しながら課題を出し、入学後にはその課題の試験を行いリメディアル教育につなげた。初めての臨地実習に取り組む 2 年生に対し、看護専門職者としての決意を表明する「戴帽式」を 6 月に実施した。11 月には「生涯学習」を実施し、11 名の卒業生と 13 名の在學生、6 名の教員の参加のもと、高齢者看護についての学びの場の機会とした。卒業生は互いの実践から刺激を受け、自己の振り返る機会となり、在學生は卒業生の実践を聞くことで、近い将来の自分のキャリアのイメージに結び付けることができた。また、3 月には「ようこそ先輩」を実施した。学生たちは、社会で活躍する卒業生の講話から、やりがいや魅力、誇りをもって仕事をしていると感じたなどの感想を持っていた。また自分の希望する進路について具体的に詳しく知れる機会となったり、専攻科への進学意欲につながっていた。先輩による現場の話はリアルであり、自分の気持ちをしっかり持って将来のために学校生活を送ろうと思ったなど、前向きな意識をもった感想が多くみられ、効果的な開催となった。

- ⑥ ボランティア活動等、課外活動の積極的な推進を通じて、ポートフォリオを活用しながらキャリア形成基礎力の向上・充実に努める。

↓

今年は、18 件のボランティア活動に対し、延べ 162 名の学生が参加した。この 18 件のボランティアは、保健・医療・福祉に関するボランティアであることが特徴的である。ボランティア活動は、子どもから高齢者まで学生たちが幅広い発達段階の対象者と触れ合えることから、授業や実習では学べない体験を通して対象理解を深める機会となっている。また、ボランティア活動の中には、教員が事前オリエンテーションを行ったり、感想文を提出してもらいコメントを返すなどリフレクションの機会としているものもある。ポートフォリオに記載し、活動を“見える化”しているが、十分な活用までは至っておらず、今後は自己実現や社会貢献につながる行動であることを意識できるよう活用方法を考えていくことが課題である。

2) 研究実績

- ① 各教員が年度内に学会発表や論文発表を行うことを目標とする。

↓

看護学科教員の研究実績は、論文 1 編、学会発表 3 編、その他 4 編であった。今年度は、学科全体で共同して取り組んだ内容を 2 編含んでおり、どの教員も何らかの形で研究活動に取り組む体制を整えた。

- ② 学科全体で共同研究体制を整え、科学研究費等の外部資金の獲得をめざすなど積極的に研究活動に取り組む。

↓

学科内で共同研究体制を 4 グループ作り、そのうち 2 件については FD・SD 活動合同発表会にて報告した。学内で実施された科学研究費獲得のためのセミナーや研究倫理研修会に参加し、研究への意識を高めた。外部資金への応募には至っていないことが課題である。

(5) 専攻科応用生命科学専攻

1) 教育実績

- ① 平成 30 年度入学者 11 名全員が専攻科を修了し、大学改革支援・学位授与機構から学士（保健衛生学）の学位を取得した。
- ② 「バイオ上級技術者認定試験」を 9 名が受験し、6 名が合格した（合格率 67 %）。
- ③ 高知学園短期大学の学外活動であるハッピースマイルフェアで骨密度測定や地域の方々との交流を通して、臨床検査技師としての実践力を養った。
- ④ 日本対がん協会主催のがん撲滅チャリティイベントであるリレー・フォー・ライフ in 高知に参加し、がんやその患者に対する理解を深めた。また、子宮頸がん予防・啓発アクション全国街頭キャンペーン in 高知で子宮頸がんの検診の重要性を呼びかけのほか、全国「検査と健康展」2018 高知に参加し、臨床検査技師としての専門性を活かして定期健康診断の重要性を訴え、高知県の健康長寿県構想に貢献した。
- ⑤ 第 37 回高知県医学検査学会で 3 名の修了生が、また平成 30 年度日本臨床衛生検査技師会・中四国支部医学検査学会(香川県)において 1 名の修了生が修了研究の成果を発表した。

2) 研究実績一

- ① 学生の主体的な学びを促すため、グループワークやロールプレイ、ケースメソッドなどを取り入れた授業を実施した。複数の科目でグループワークを実施することで、学生たちはグループの中で自分の役割を果たしたり、自身の意見を他者に言葉にして伝えたりすることが段階を追って実践できるようになった。また、いくつかの科目でルーブリックによる評価やリフレクションシートなどを活用して、学生の到達目標に対する達成度の評価を行っている。ルーブリックを活用した科目では、授業初回到ルーブリックと授業計画を学生に示し、科目の目的と到達目標、実施内容、評価方法について共通理解し、授業最終回到学生が自分でもルーブリック表を用いて評価することで、達成度を客観視できるよう努めている。リフレクションシートでは、単元ごとの到達目標の確認と授業後の学生の理解度が把握できるため、次回の授業の際に不足分を補ったり、確認したりすることで到達目標の達成につなげている。さらに平成 30 年度は、ルーブリック作成にあたって、まずは各科目間の連動や役割分担について、平成 30 年 3 月に出された公衆衛生看護学教育モデルコアカリキュラムをもとに担当教員間で検討を行った。今後も引き続き検討を重ねながら、学生が学習成果を達成できるよう、各科目の到達目標の見直しとルーブリック評価の整備に向けて取り組んでいく必要がある。
- ② 公衆衛生看護学の対象とする地域や生活を体験から理解することで、保健師の役割について学びを深めるため、平成 30 年度も土佐町においてフィールドワークを実施した。フィールドワークは、土佐町社会福祉協議会や土佐町役場との連携のもとに 1 泊 2 日で実施した。フィールドワークの内容は、住民主体の地域組織活動へ参加し、住民と交流を図り中山間地域の生活やそこで暮らす人々の声に耳を傾けること、地区踏査、地域で活動する人々との交流などを行った。特に 3 年目を迎えた平成 30 年度は、学内での振り返りの時間を増やし、経験してきたことをまとめ、そこから何がみえてくるのかを考える作業を強化した。また、学生の学びを分析した結果、コミュニケーションに苦手

さをもつ学生が、地域の中で住民に受け入れられる体験を通して、自発的に関心をもって人々に関わることができたり、地域を診る視点を身につけたり、住民とともに活動するという言葉の意味を体験から学び取っていることが分かった。このことから、フィールドワークでの経験が公衆衛生看護のイメージ化を図るだけでなく、保健師に求められる活動の基盤となる力を身につける一歩になっていると考えた。3年間の実績から、実践してきたプログラム内容には一定の効果があることが確認された。一方で、広く生活を捉えていくため、健康課題よりも地域活性化に焦点が当たってしまう場面があった。そこで、よりフィールドワーク後の振り返りを保健師教育の視点で充実させていくと共に、他市町村での実施も視野に入れて検討していく。

- ③ 独立行政法人大学改革支援・学位授与機構による特例適用専攻科及び認定専攻科として、1年間のスケジュールを計画通りに進めることができた。平成30年度は、審査方法が異なる特例適用専攻科と認定専攻科が並行して進行する初めての指導体制となったため、学生への説明と教員間での情報共有の強化を図ることに努めた。また、研究指導は、領域毎に教員が3つのグループに分かれ、定期的に討議の場をもち、課題を出し合いながら行った。さらに3つのグループで検討された内容は、学科・専攻科会議などで全体での情報共有につなげた。そして、教員の研究指導力向上を目指し、教員の研究に関する勉強会を5回シリーズで開催した。今後も引き続き、研究指導における課題を検討しながら学生の学習成果の獲得に向けて取り組む必要がある。
- ④ 公衆衛生看護学実習では、実習評価の項目のひとつとしてルーブリックを取り入れ、学生と指導保健師が共通の内容で評価を行っている。しかし、実習場所によって体験できる内容に違いがあり、設定している目標が達成できないことが課題として挙がっていた。毎年、現状に合わせてルーブリックの細かな内容の修正は行っていたが、再度、現状に合わせて実習目標とルーブリックの見直しが必要であると考えた。そこで、平成30年度はルーブリックの大幅な見直しに向けて、公衆衛生看護学実習終了後に実習担当の保健師と評価項目に対する意見を伺い、検討する時間をもった。今後、その内容や国で行われている看護基礎教育検討会の検討結果を踏まえて、実習の到達目標をどのレベルにするのか、最低限の必須項目、評価項目の内容と数等、担当教員間で検討しながら、見直しを進めていく必要がある。
- ⑤ 学生の就職、進路支援を効果的に行うために、平成30年度から進路支援担当者会の開催を開始し、看護学科と専攻科の連携をシステム化した。進路支援担当者会では、看護学科長、専攻長、就職委員と担任が、県内外の就職に関する情報（募集人数、時期、試験回数、受験者数の動向など）を共有し、看護学科入学時からの切れ目のない進路支援のあり方について検討した。平成30年度は専攻科入学予定者を対象に、入学前オリエンテーションにて、進路希望調査を実施し、看護師、保健師、養護教諭の希望職種別で、それぞれに必要な準備などについて、具体的に学生と話し合い、早期から行動に移せるように支援した。在学生の就職活動では、進路希望調査を活用し、学生と教員間で就職活動に関する希望や、情報を共有した。そして、学生一人一人の受験先に応じた応募書類の作成や小論文対策、面接練習などを行い、支援した。

2) 研究実績

(本科を含む。)

※平成 30 年度国家試験受験状況（参考）

学 科		試験名称	受験者数	合格者数	合格率	全国合格率
医療衛生学科	医療検査専攻	臨床検査技師国家試験	37	34	91.9%	75.2%
	歯科衛生専攻	歯科衛生士国家試験	30	29	96.7%	96.2%
看護学科		看護師国家試験	54	49	90.7%	89.3%
専攻科地域看護学専攻		保健師国家試験	20	17	85.0%	81.8%

[2] 高知中学高等学校

1 事業の概要

建学の精神である「人に信頼される人物の育成」を具現化するため、五つの教育目標（・たくましい心とからだ ・確かな基礎学力 ・豊かな情操 ・信頼される人間 ・自立）及び学校生活の三原則（・正しい身なり ・掃除の徹底 ・挨拶の励行）を掲げ、全校教職員・生徒がこれを実践した。

2 事業の実績

(1) 入学生の確保

入学生数を中学校 160 人、高校 220 人確保するために、年間を通じて積極的に広報募集活動に取り組んだ。

① 主な募集活動

- ・学校案内・募集要項を高知市内及び周辺地区の小学校や県内中学校・学習塾に送付するとともに、小学校・中学校挨拶回り・県内塾回りや公立中学校の進路説明会に参加した。
- ・6月に中学オープンスクール、10月には地区別入試説明会を県内5会場で開催した。11月開催の本校での入試説明会ではあらたに体験授業を設けた。
- ・中学校受験者を対象に学校説明会Winterを、11月から1月にかけて本校で3回開催した。
- ・本中学校に在籍する生徒のうち小学6年生の弟妹がいる家庭に対して、中学受験を呼び掛けた。
- ・高校推薦入試の受験者増の対策として、部活動顧問からの働きかけを強化した。
- ・ホームページ及びフェイスブックにて、日々の教育活動を細やかに情報発信した。
- ・官民の各種イベント行事や地域ボランティア活動に、積極的に部活動単位で参加した。

◇学期ごとの主な募集活動の状況

1 学期	学校案内の部分改訂 県内公立中学校主催の学校説明会に参加（城北、西部、愛宕、加茂、横浜） 中学オープンスクール開催「小学5・6年生のためのオープンスクール」 ・体験授業（英語・数学・理科・家庭・美術）・部活動体験 86人参加 こうち私立中高合同進学フェア2018に参加
2 学期	県内公立中学校及び学習塾へ学校案内・募集要項等の送付 公立中学校及び学習塾を訪問 地区別入試説明会（土佐市、須崎市、南国市、安芸市、四万十市の5会場） 高知小学校保護者対象の中学校入試説明会 高知小学校児童のためのオープンスクール（小中連携事業） 県内公立中学校主催の学校説明会に参加（春野） 入試説明会開催（入試説明会、体験授業・部活体験）122人参加 学校説明会Winter 学習塾訪問

3 学期	高校推薦入試 (1/11) ・ 一般入試 (1/25) (本校、安芸、四万十の 3 会場) 学校説明会 Winter 中学入試 (2/16、17) 、 中学 2 年生転入学試験 (2/16) 中学Ⅱ期入試個別説明会 県内公立中学校主催の学校説明会に参加 (高岡) 中学Ⅱ期入試 (2/23)
------	--

② 内部進学率の向上 (小中高 12 年間の教育連携)

小中高 12 年間の教育連携を推し進めるなかで、高知小から高知中への内部進学率は 50%以上、高知中から高知高への内部進学率は 95%以上を目指し取り組んだ。

[小中連携の取り組み]

- ・ 7 月に実施したオープンスクールのうち、高知小の参加者は 17 人であった。
- ・ 高知小児童や保護者に高知中の魅力を伝達するため、10 月に高知小にて入試説明会を実施した。
- ・ 同月に本校にて高知小児童を対象としたオープンスクールを実施し、5 限目に 5・6 年生に授業体験、6 限目に 4～6 年生に部活動体験を行った。
- ・ 11 月の小学校学習発表会に吹奏楽部、軽音楽部が出演した。中学校音楽発表会に 5 年生が参加し、合唱を披露した。2 月に 4 年生を対象に天体観測を実施した。3 月に 1 年生が世界の鐘を見学した。
- ・ 3 校 (小中高) 児童・生徒によるあいさつ運動を行った。
- ・ 小中の管理職等が出席する連携会議を月例会として開催し、定期的な情報交換を行った。

[中高連携の取り組み]

- ・ 高知中 3 年生徒・保護者に高知高校の魅力を伝達するため、12 月に保護者を対象に、高知高校への進学説明会を実施した。また、高知高校 P R 動画の視聴も行った。
- ・ 中高合同での教科会及び校務分掌における部会を定期的で開催し、連携を図った。6 年間で生徒を育成することに注力することを、P T A の会等で保護者に説明した。

③ 入試結果

- ・ 中学校では志願者が前年度と同数であったものの、入学者は前年度対比 8 人増の 124 人となった。高知小からの内部進学率が 3 年続けて 20%台で低迷しており、小中連携教育を軸とした 12 年間の教育連携を一層推進する必要がある。
- ・ 高校では志願者数が推薦入試で前年度より 19 人増であったものの一般入試では 40 人減となった。推薦入試での有力部活動の積極的な生徒勧誘が奏功した一方で、一般入試でそれ以外の受験生の掘り起こしに課題を残した。

高知中からの内部進学者は、進学率で前年度と同水準の 82%を維持した。

以上の結果、入学者は前年度対比 2 名減の 193 人となった。

◇入学者数の状況

中学校

(単位：人)

年度別	入学者数	入試別内訳	
		I 期入試	II 期入試
H31 年度	124 (129)	109 (112)	15 (17)
H30 年度	116 (129)	102 (110)	14 (19)
増減	8 (0)	7 (2)	1 (△2)

※ () 内は志願者数。

高校

(単位：人)

年度別	入学者数	入試別等内訳		
		推薦入試	一般入試	内進者
H31 年度	193 (312)	45 (47)	32 (125)	116 【140】
H30 年度	195 (338)	27 (28)	48 (165)	120 【145】
増減	△2 (△26)	18 (19)	△16 (△40)	△4 (△5)

※ () 内は志願者数。【 】内は卒業生数。

(2) 教員の資質・指導力の向上と授業改善の推進

教員の指導力向上の取り組みとして、教員一人ひとりが指導方法を工夫して必要な知識・技能を教授しながら、子どもたちの思考を深める方法など、学びに必要な指導の在り方を研究・実践した。

- ・中学校においては学期ごとに授業公開週間を設定し、教員が相互に授業参観を行った。また、年3回、齊藤一弥島根県立大学教授を招聘し授業研究会を実施した。
- ・高校においては、夏期休業中に5教科(国数英理社)の教員5人が県外大手予備校主催の教員研修に参加し、授業力の向上及び受験指導の向上に努めた。
- ・予備校講師による特別授業及び新大学入試制度に関する教員研修を行い、大学受験指導のスキルアップに取り組んだ。
- ・学校評価アンケートは、中学校で15項目について実施し、昨年度結果よりも肯定的評価が増加した。6項目については、課題が見られた。高校は16項目について実施して、教員の授業内容や指導方法の改善に努めた。
- ・授業研究・研修会への積極的な参加を、昨年度に引き続き推奨した。
- ・教員のセルフケアの力を向上させるため、細木ユニティ病院臨床心理士 野瀬一央先生を招いて、心の研修会を実施した。

(3) 特進クラスの学力引き上げ

特進クラスでは、自主学習習慣の確立に取り組むとともに、教科指導力のある教員を配置し、授業改善の推進や習熟度別授業、国数英の補習授業、個別指導、休業期間中における勉強合宿等を実施した。

[中学校での取り組み]

- ・ N I E 教育（新聞を活用した授業等の取り組み）を一層推進するため、継続的にワークシートづくりを行ったり、新聞社職員を講師に「運動会新聞」づくり等を行った。
- ・ 大学受験の中核科目となる英語の実力養成につなげるために、中 2・3 年を対象に、外国人指導者（A L T）が合計約 300 時間、授業を行った。
- ・ 中 1・2 年においては、高知県学力定着状況調査に参加し、個別指導の参考にした。その結果は昨年度に引き続き、全ての学年、教科において高知県の平均正答率を超えていた。
- ・ 火・水・金の早朝に、数学の指導を実施し、中 3 年が参加した。
- ・ 夏期休業期間中に課外授業（発展的学習）を実施、冬期休業中に中 3 対象に補習授業を実施した。
- ・ 夏期勉強合宿に参加した。
- ・ 昼休み及び放課後にパソコン室を生徒に開放し、生徒が自主的に学習する機会を設定した。また、家庭学習時間調査を各学期に実施し、家庭学習習慣の確立状況を把握させた。

[高校での取り組み]

- ・ 習熟度別授業・国数英の補習授業等を継続、充実させた。
- ・ 高 2・3 年の英語において習熟度別授業を行った。また、高 2・3 年の数学においては進路に応じて選択科目を構え対応した。
- ・ 年間を通じて放課後 S1（特進クラスは強制・文理クラスは希望受講）・S2（特進クラス希望受講、高難度）の補習を実施した。また土曜休業日にも補習を実施した。
- ・ 高 1・2 年では 2 回、高 3 は 1 回、スタディサポート（国数英）を実施し、基礎学力の定着状況を確認し、向上に力を入れた。
- ・ 国公立・難関私立大受験希望者を対象に、夏期勉強合宿（かんぼの宿伊野、5 教科）を実施し、代ゼミ講師を招いての英語授業も取り入れた。
- ・ 夏期補習、冬期補習、春期補習に延べ 1600 人が受講した。また、県外大手予備校講座に高 2 年が 5 人（冬期）、高 3 年が 5 人（夏期）受講した。
- ・ 高 1 年において 30 年度より Classi（ICT 機器を利用した学習支援教材）を導入し、学年で計画的に課題を配信し、担任が確認・指導した。また、Classi のポートフォリオ機能を利用し、活動履歴の蓄積を随時行った。
- ・ 高 3 年を対象にした進学のための面接・マナー講座（筒井典子先生 人・みらい研究所）を実施、面接の基礎及び実践トレーニングを行った。
- ・ 専門外部講師による志望理由書・小論文指導を、高 3 年に 5 回、高 2 年に 5 回、高 1 年に 4 回、実施した。
- ・ 高 2 年を対象に代ゼミ講師による現代文・小論文授業を行った。

(4) 進学意識の醸成

中学校では社会における自らの役割や将来の生き方、働き方を考えさせ、目標を立てて計画的に取り組む態度を育成し、進路選択・決定に導くことを、高校では生涯にわたる多様なキャリア形成に共通して必要な能力や態度を育成、また、これらを通じ、勤労観・職業観等の価値観を自ら形成、確立することを目指して取り組んだ。

[中学校での取り組み]

- ・中3年を対象に、新聞記者・消防士・看護師・美容師・言語聴覚士・印刷業従事者・公務員・獣医師・理学療法士・保育士・ガス会社員を招聘し、職業講話を行った。
- ・世界銀行に勤務している本校OBを招き、全学年を対象に「勉強って必要なの」の演題で講演会を開催した。

[高校での取り組み]

- ・高1・2年を対象に県内の国公立大学3校と、大阪・京都の大学2校（1泊2日）のオープンキャンパスに参加した。
- ・教員志望の高1、2年を対象に高知大学教育学部 野中陽一先生を招いてのキャリアガイダンスを行った。
- ・高2年を対象に県内外17の大学・短大等の担当者を招いて、大学講義体験講座を実施した。

(5) 進路指導の実績

- ・国公立大学への進学者は前年度対比1人増の11人であった。
- ・フェローシップを通じて、短大及びリハへの進学を積極的に呼びかけた結果、短大に16人、リハ大に20人が内部進学した。
- ・ここ数年、教員の取り組みに変化と積極性が生まれ、成果が間違いなく出始めている。
- ・大学・短大進学を合わせた、いわゆる大学進学率の変化は次のとおりである。

平成27年春 48.0% + 9.3% = 57.3% (全国：54.6%)

平成28年春 51.2% + 3.4% = 54.6% (全国：54.8%)

平成29年春 46.2% + 12.8% = 59.0% (全国：54.8%)

平成30年春 56.9% + 6.4% = 63.3% (全国：54.8%)

平成31年春 63.7% + 9.5% = 73.2%

- ・本校のこれまでの評価方法や評価基準について見直しを行った。

[現役生・浪人生の合格者延べ人数] (単位：人)

	現役生	浪人生	合計	
国公立大学	11	0	11	*国公立大学 高知大5、高知工科大5、下関市立大1
私立大学	141	6	147	*私立大学
短期大学	20	0	20	中央大、東洋大、法政大、亜細亜大、明治大、東海大、 駒澤大、追手門大、京都産業大、関西大、関西学院大、 神戸学院大、桃山学院大、関西外国語大、岡山理科大、 徳島文理大、四国学院大、松山大、高知リハ大 (20)
専門学校	32	3	35	
各種学校	5	1	6	
合計	209	10	219	
就職	13	1	14	

[現役生の進路（卒業生数201名）] （単位：人）

	人 数	割 合	備 考
4年制大学	128	63.7%	関東17%、関西21%、中国17%、高知を除く四国14%
短期大学	19	9.5%	高知学園短期大学 16人
専門学校	29	14.4%	
就 職	13	6.5%	自衛隊3人、高知県警1人、企業9人（県内6、県外3）
その他	12	6.0%	各種学校5人、浪人1人、未定4人、その他2人
卒業生数	201		

(6) 防災教育の取り組み

南海地震等の大規模災害から命を守るための意識づけや取り組みを、ボランティア活動や防災訓練などを通して学び実践した。

- ・高知市地域防災推進課及び旭東小校区防災連合会と協議を重ねながら、本校体育館の避難所運営マニュアル作りに着手した。
- ・西日本豪雨で甚大な被害が発生した大月町で、7月災害ボランティアに生徒43人、教員10人が参加し、住宅や公共施設の泥出しを行った。
- ・高校生徒会2人が県津波サミットに参加し、宮城県被災地を訪問した。
- ・三者協力会（保護者・生徒・教職員）で、生徒会代表者が大月町災害ボランティア活動及び県高校生津波サミット宮城県訪問の報告を、保護者・生徒に行った。
- ・高校において、年2回生徒による防災関係活動の報告会を開催した。
- ・本校主催の防災イベントを旭東小校区防災連合会や地域量販店の協力のもと同店広場で開催し、レオクラブ及び生徒会代表者が高校生目線で防災の取り組みを呼び掛けた。
- ・中高合同で3月に避難訓練を実施した。

(7) 部活動等の実績

- ・13の運動部及び2つの文化部が全国大会に出場した。全国中学校総体では野球部が全国優勝を成し遂げた。
- ・全国の中中学生を対象に、生命保険の役割などについて理解を深めることを目的とした、第56回全国中学生作文コンクールにおいて、全国1,129校、34,870編の中から、中2生が優秀賞を受賞した。

◇全国大会出場の実績

	中学校	高校
体操部		全国高校総体 女子団体、男子個人
剣道部	全国中学総体 男女団体、男女個人	全国高校総体 男女団体、女子個人 全国高校選抜 男女団体
弓道部		全国高校選抜 男子団体（2位）
バレーボール部	全国中学総体 男子	全国高校総体 男子 全日本バレー高校選手権 男子

テニス部		全国高校総体 男子団体・個人
ライフル射撃部		全国高校選手権 男子個人
空手道部		全国高校総体 男女個人
水泳部		全国高校総体 男子個人
柔道部	全国中学総体 男女個人	全国高校総体 男女個人 全国高校選抜 男女個人
サッカー部	全日本ユース (U-15) フットサル (準優勝)	
野球部	全国中学総体 (優勝)	
少林寺拳法部	全国中学生大会 女子個人	全国高校選抜大会 男子
陸上部	ジュニアオリンピック陸上競技大会 走り幅跳び 女子個人 (5位)	
吹奏楽部	マーチングバンド全国大会、 全日本中高管打楽器ソロコンテスト (ユーフォニアム) (3位)	
軽音楽部		全国高校総合文化祭 (3位)

(8) 施設設備の改善と充実

- ・ 武道場の柔道畳の半数 70 枚を取替した。
- ・ トイレ大便器 12 箇所 (高校棟 3～5F、中学校棟 3～4F 及び体育館 2F) を和式から洋式に改修工事を行った。
- ・ 管理棟 3 階の生物実験室を同 5 階に移設のうえ、実験室跡を図書館に改修工事を行った。
- ・ 旭グラウンド場内植樹計画の 3 年目として、場内に桜の若木を 21 本植樹、記念セレモニーを実施した。
- ・ 温水プール床下配管を支える吊バンド等の取替工事が完了した。

3 人事計画の実績

- ・ 本務教員は計画より 1 人減の 70 人 (期限付講師 7 人を含む)、兼務教員は計画通りの 18 人であった。
- ・ 本務職員は計画通りの 5 人、兼務職員は計画通りの 13 人であった。

[3] 高知小学校

1 事業の概要

教育方針である「紳士・淑女（まごころをつらぬく子）の育成」にそって、日々の教育実践に努め、高知小学校が目指す子ども像（勉強にうちこむ子、仲良く助けあう子、ねばり強い子、ゆたかな心の子）を具現するために、指導目標、重点目標として次のことを掲げる。

(1) 「指導目標」

- ① 児童の安全確保を最優先とし、指導の2本柱である「確かな学力の定着」「しつけ指導の徹底」を行う。
- ② 積極的な学習態度を養うとともに、一人ひとりの個性や可能性を尊重した指導を行うとともに、進路指導の強化・充実を図る。
- ③ 教職員の資質・指導力向上を図り、児童の意欲を引き出す教育実践に努める。全教職員が全児童を把握した上で指導にあたる。
- ④ 幼・小・中高連携教育を推進する。

(2) 「重点目標」

- ① 子どもの夢と希望を叶え、保護者の期待に応える学校をめざす。確かな学力の定着としつけ指導の徹底を図るため、1時間1時間の授業を大切に、その質の向上に努める。
- ② 教員の資質・指導力向上に向けた研修の充実を図る。教員個々が自己研修による指導力向上に取り組む。外部講師招聘による校内授業研究会を開催する。
- ③ 児童募集活動の見直しと強化を図り、募集定員確保に努める。
- ④ 登下校及び学校生活における児童の安全確保に努める。
- ⑤ 総合学園として小学校の位置づけの中で、幼・小・中高連携教育を推進する。（幼稚園からの入学、中学校への進学に視点をあてた連携教育に取り組む。）また、小学校の特色である英語教育の見直しと充実を図る。

2 事業の実績

(1) 日々の授業の充実と学力の向上・定着を図る取組

- ① 本校創立以来継続している英語教育において、ネイティブ教員と専科教員、担任のチームティーチング体制は、5年目を迎え授業内容が充実してきた。6年生の英語発表も、昨年度の発表を聞いた子どもたちは、創意工夫を重ねて意欲的な発表ができるようになってきた。6年間の学習の集大成としての意義が高まるとともに、聞く方も発表する方もともに学び合うことができた。
- ② 今年度初めて全国学力学習状況調査を実施した。本校6年生の国語A・B、算数A・Bの平均点は、ともに全国平均より9～12ポイント高く、全国1位の県よりもさらに5～10ポイント高いという結果だった。今後も調査結果を分析し、引き続き「分かる楽しい授業」づくりに学校全体で取り組んでいきたい。

また学習状況調査結果については、将来の夢や目標を持っている児童が85%(全国68.2%)、学校以外で1日3時間以上勉強している児童が73.6%(全国12.9%)と多く、週に3回以上新聞を読んでいる児童が半数近くいること、通塾等による睡眠時間の不足など生活習慣が不規

則な児童が多いということもわかった。今後も、学校と家庭が連絡を取り合いながら「知・徳・体」のバランスのとれた子どもたちを育成する。

- ③ 全学年で、10 分間の計算テスト、漢字テストを行い、基礎学力の定着を図った。パーフェクト賞（100 点）を設定していることが、取り組みの励みとなっている。
- ④ 5 年生は学期末テスト、6 年生は実力テストを実施し、理解度・学力を確認するとともに、補習等を通して理解の定着を図った。実力テストは、中学校進学へ向けての大切な指標ともなり、中学校入試へ向けての意欲づけになっている。
- ⑤ しつけ指導については、児童手帳「わたしたちのきまり」を基に週目標を設定して、全教職員で共通理解を図りながら指導した。

(2) 教員の資質・指導力向上に向けた研修の充実

- ① 全員が年間を通して 1 回の研究授業を行い指導力アップに繋がった。また、国語科、算数科を中心に、「論理的に思考し、自分を表現することのできる子どもの育成」をテーマとした研究を深めてきた。国語科の研究では全学年で講師を招聘し全校授業研究会を開催した。
- ② 全教員が市教研（高知市教育研究会）の研究研究会に参加し、各教科別に研究会に参加した。また、土佐研（土佐教育研究会）の主催する県国語教育研究大会にも全教員が参加した。特別支援教育については、高知リハビリテーション学院の先生を講師として支援会議を行い、具体的な支援方法を学び、実践に繋げることができた。総合学園としての連携教育として、今後も継続して取り組んでいきたい。

(3) 学習や生活面での充実を図るための支援体制の確立

- ① 学校カウンセラーは、週 8 時間（火曜日と木曜日に各 4 時間）体制での 5 年目を迎えた。児童・保護者・教員が毎回相談をしており、悩みの解決や児童の学習・生活面での意欲向上に大きく寄与している。特に友人関係での相談が多く、相談内容についてカウンセラーと担任が話し合うことで、早い段階での課題解決に繋がっている。
- ② 特別に支援を要する児童については、個別支援シートに基づいて、定期的に支援会議を開催した。具体的な指導方法を話しあうとともに、支援員が学級に入って支援を行うことで、子どもの変容に繋がった。また、関係機関との連携を計りながら 1 人ひとりを大切にされた地道な実践を行った。
- ③ 基本的な生活習慣の大切さについて、全校集会や学級指導で訴えるとともに、日常の学校生活の中で人に迷惑をかけないことや嫌がることをしないこと、思いやりを持って友達に接すること等を繰り返し指導した。また、明るく元気に学校生活を送ること、ものごとの良さや美しいものに感動することについても機会あるごとに伝えた。
- ④ QU アンケート（楽しい学校生活を送るためのアンケート）を実施し、子どもたちの「やる気」や「学級内での居場所があるか」等を分析・検討して、よりよい学級集団づくりに繋がった。

カウンセラーが担任に分析・検討結果を話す中で、子どもの変容に至る指導過程が明らかとなり、他の学級での指導に役立つ提案がされるようになった。また、日々の生活の中で、いやなことがないかを問う「相談箱」設置して、友だち関係での課題の早期発見・早期解決に努めた。深刻に悩む前に解決していく手だてとしている。また、子どもの心のサインを見

落とすことがないように、子どもへの声かけや家庭への連絡を密に行い、いじめやトラブル等の未然防止に努めた。

(4) 登下校及び学校生活における児童の安全確保

- ① 登下校時の安全確保の観点からスクールバスを利用する児童が多いため、4台運行体制を継続した。また、1・2年生を対象とした交通安全教室や全校児童対象の乗り物別指導を行い、登下校中の安全指導を行った。
- ② 緊急時の対応として、全校で地震・津波を想定した避難訓練を行った。緊急時の備蓄食料として飲み水と乾パンを購入した。(毎年購入)
- ③ 学期に1回、校舎内外に危険場所がないかを点検し、安全確保に努めた。

(5) 総合学園の中の小学校としての幼・小・中高連携教育の推進

- ① 幼小連携教育では、各学年と園児が有意義な交流ができるよう年度始めには年間計画を見直し、年度末には反省会で成果と課題を出し合うことで次年度につなげている。1年生と年長児と一緒に英語を学んだり、お弁当を食べたりの活動を通して小学校生活への期待感を育てるような交流も取り入れている。
- ② 小・中高連携教育では、毎月1回の定例会を開催し、児童・生徒が一同に会して交流できる機会を多く持つようにした。(中学校での部活見学、1年生の世界の鐘体験、4年生の月の観察、5年生の文化祭への参加、水泳・陸上・バスケット等での合同練習)。中・高校生の持つ技量の素晴らしさにふれることで、中・高で学ぶことへの意欲を育て、中学校への進学児童の増大に繋げていきたい。

3 募集活動

(1) オープンスクール・後期学校説明会や新聞広告、園訪問や体験入学、また RKC 主催のイベント「すこやか 2018」に参加するなど、募集活動に努めた。

(2) 基礎学力の定着と向上に向けた学習指導、きめ細かな生活指導を継続することで、保護者の信頼を得て、高い学校評価に繋がるように努めた。

(3) 子どもたちが生き生き活動している様子や本校の特色ある取り組みを広くアピールするため、ホームページと学校案内のリニューアルを行った。

- ① ホームページでは、学校行事等日々の子どもの様子リアルタイムで掲載でき、保護者からも好評を得ている。
- ② 高知幼稚園からの入学者は、13名(前年度12名)であった。兄弟姉妹関係にもよるが、今後も幼小のより良い連携のあり方を探り、小学校の取り組みを広くアピールしていく必要がある。
- ③ 31年度入学児童の選考においても、オープンスクール参加者、学校見学者の出願率が高かった。日常の学習や生活の様子を直接参観して、学習に取り組む意欲や姿勢、積極性などが、評価されたものと思われる。保護者の評価は教員の指導力や取組姿勢と密接な関係があるので、さらに教員の指導力・資質の向上に努めたい。

- ④ オープンスクール参加者や学校訪問者の中で、出願の無い方については園訪問や電話での確認、また、後期の募集案内を持参する等の募集活動を行った。
- ⑤ 昨年度、入学考査について見直しを行った。今年度も考査結果を総合的に判断して合格者を決定したが、受考者数が 52（昨年度比△17）、合格者数 45（昨年度比△13）と厳しい結果となった。新入生の出身園をはじめ、在校生の出身園を中心に積極的な募集活動を行いたい。

[入学者状況]

	受考者	合格者	入学者	欠席・辞退
31年4月入学	52	45	45	
30年4月入学	69	58	57	辞退 1
29年4月入学	63	62	61	欠席 1・辞退 1
28年4月入学	46	45	45	
27年4月入学	47	47	46	県外転出 1

4 人事計画

- (1) 全学年 2 クラスであり、合計 12 クラスであった。
- ① 本務教員は 16 名、兼務教員は 10 名であった。
 本務教員（学級担任 12 名、英語専科 1 名、養護教諭 1 名、
 教頭 1 名、校長 1 名）
 兼務教員（理科 1 名、音楽 2 名、書写 2 名、英語 1 名、TT 教員 2 名、
 習い事 2 名(ピアノ)
- ② 本務職員は 1 名、兼務職員は、6 名であった。

5 教育・研究実績

- (1) 児童のために実施した諸計画
- ① 読み書き・計算の強化（全校漢字・計算テスト）
 漢字・計算を年間 13 回実施した。
- ② 朝の読書、保護者による読み聞かせ
- ③ 美術館・商店・工場見学
 高知県立美術館を 6 年生が見学。
 2 年生、木曜市見学。3 年生図書館、消防署見学。
- ④ 防災学習、避難訓練
 小学校独自で開催。
- ⑤ 校内植物教室や舞台芸術の鑑賞、映画教室の開催
- ⑥ 高知幼稚園との交流学习
- ⑦ 学習発表会、6 年生を送る会、合格おめでとう会
- ⑧ TT の継続（配慮の必要な児童への支援を実施）
- ⑨ 班毎にテーマを決めて、各学級を回って英語発表（6 年生）
- ⑩ 「こども高新」「声ひろば」への投稿
 3 年前から NIE 教育に取り組んでいることから、高学年からの投稿回数も多くなっている。

(2) 児童が受賞したコンクールや作品展、大会

第69回こども県展 総合優秀校 毛筆最優秀校 硬筆優秀校
【こども県展賞】毛筆 1名 【推薦】硬筆2名 条幅1名
【特選】毛筆20名 硬筆27名 図画7名 条幅3名

夏休み学習旅行招待

作文の部【入賞】2名（東北地方に3泊4日の旅行招待） 【佳作】2名
毛筆の部【佳作】1名
図画の部【佳作】2名
（一次合格者 書写10名 作文22名 図画6名）

MOA美術館高知児童作品展

図画【MOA美術館奨励賞】1名 【高知県知事賞】1名 【高知市長賞】1名
【高知県議会議長賞】1名 【高知市議会議長賞】1名
【高知市教育長賞】1名 【高知県小中学校長賞】1名
【高知新聞社賞】1名 【高知放送賞】1名
【さんさんテレビ賞】1名 【テレビ高知賞】1名
【金賞】4名 【銀賞】4名 【銅賞】2名
書写【南国市長賞】1名 【高知県小中学校長賞】1名 【実行委員長賞】1名
【金賞】3名 【銀賞】1名 【銅賞】1名

第66回統計グラフコンクール

（本校は約30年以上、高知県の指定となっています）

第1部（1・2年生）【知事賞】1名 【教育長賞】1名
【入選】2名 【佳作】2名 【努力賞】2名
第2部（3・4年生）【知事賞】1名 【教育長賞】1名
【入選】2名 【佳作】1名
第3部（5・6年生）【知事賞】1名 【教育長賞】1名
【入選】1名 【佳作】1名 【努力賞】1名

第53回美術教育総合展

立体の部 【特選】4名 【入選】12名
描画の部 【特選】1名 【優秀】2名
自由平面の部 【優秀】8名 【入選】50名
毛筆の部 【特選】33名 【優秀】21名

青少年読書感想文コンクール

高知県【優良】1名 【入選】5名

こども小砂丘賞作文コンクール

【優秀】2名 【優良】12名

高知「環境絵日記」

【優秀特別賞】3名 【えこらぼ賞】16名

第68回全国小・中学生作文コンクール

【高知県教育文化祭賞】1名 【読売賞】5名

第71回高知市科学展覧会

【KSSこうちさんさんテレビ社長賞】2名 【優秀賞】7名 【佳作】3名

第85回NHK全国学校音楽コンクール

銅賞

毛筆・硬筆は経験豊富な専科の教員が指導にあたった。また、開校以来、作文教育に力を入れ、日々の日記指導などに活かしている。

本校が開校以来『めざす子ども像』として掲げている「ねばり強い子」「勉強にうちこむ子」「豊かな心の子」「仲良く助け合う子」に向けて、児童1人ひとりが自己を見つめ精進していかうとするところに、本校教育のめざす基本的な特色がある。

(3) その他の事業実績

進学状況（高知中学校への進学率 24%）

高知 13 名、土佐 13 名、土佐塾 13 名、学芸 4 名、土佐女子 3 名、県立国際 1 名、
公立 2 名、県外 5 名（私立 5 名）（卒業生 54 名）

5 施設設備等の改善と充実

- (1) 児童女子トイレ便器の改修（6基 和式→洋式）
- (2) 電子黒板2基設置（計4基）
- (3) グラウンド人工芝の改修、
- (4) バasketボールのコートラインの設置、走り幅跳び用走路・砂場の設置
- (5) グラウンド体育倉庫の鉄部等の塗装
- (6) 図書館・パソコン室のエアコン改修
- (7) 校内放送設備の改修
- (8) 屋上変電設備の改修
- (9) 児童用机・椅子 114 セット交換
- (10) 鉄琴 1 台購入
- (11) 新規 AED に交換
- (12) 学校南駐車場ブロックフェンスの改修

[4] 高知学園短期大学附属高知幼稚園

1 事業の概要

「幼児自ら気づき、考え、行動することのできる『生きる力』の基礎を養うと共に、心身共に健康でたくましい子どもを育成する」を目的とし、4項目の重点目標を定め、その達成に向け取り組んだ。

- (1) 入園児確保のためにより効果的な募集活動をする。
- (2) 幼児は五感を通した豊かな体験をし、心身ともに健康でたくましい子どもに育てる。
- (3) 教職員は実践的な研修・資質向上に努め、子どもに「生きる力」の基礎を養う。
- (4) 地域や家庭、学園内組織との連携を更に深める。

上記の重点目標は、概ね達成され、継続を必要とすることについては日々努力している。

2 事業の実績

- (1) 入園児確保に向けた取り組みでは、校務分掌の園児募集・園開放担当者を中心に年間計画をたて内容の充実に努めた。

- ① 平成31年3月までの来園者数40名、そのうち30年度たんぽぽ組入園児23名、2019年度年少入園児17名
- ② 1年間の「あそびにおいでよ」の予定表を渡し、節季にあった作品を作り持ち帰った。保育者は見本として一冊のファイルにまとめ、園に保管し次年度の参考としている。
- ③ 未就園児のみの運動会を10月13日(土)に開催した。
- ④ 年4回体験入園説明会を実施した。(H30年7月28日(土)・10月13日(土)・11月14日(水)・H31年1月16日(水))また、随時説明も4組の保護者にした。
- ⑤ ホームページによる園紹介と、各学年の保育の様子を毎週末ブログに載せ、園での取り組みを紹介した。
- ⑥ 募集チラシを折り込み広告として年1回配布した。また、小学校に在籍する家庭数と・園児の家庭にチラシを配布し入園児確保の声かけをしていただくようお願いした。
- ⑦ 学園内組織との連携交流。特に短大から毎週のリズム指導・小学校との交流は本園が高知県下で唯一の総合学園であることをアピールすることができた。
- ⑧ 子育て応援団 すこやか2018に参加し、園児の発表や園紹介をした。
ブースでは、子ども達の喜ぶ動物ヨーヨーを配付し、その間、対象となる保護者に「園開放のチラシ」・「体験入園説明会のチラシやパンフレット」を説明しながら配布していった。その結果、常に、園開放時2~3名程度の来園者があり、入園につながった。
- ⑨ RKC子育て応援団に協賛し、キャンペーンCMを流す。(TV、ラジオ)現在も継続中。

入園者数の状況

	学 年	在園児数実績（5月1日現在）	
		30年度	31年度
満2歳児	たんぽぽ(ひよこ)	10	12
満3歳児	たんぽぽ	0	2
3歳児	もも	26	27
4歳児	ゆり	41	28
5歳児	ばら	26	45
合 計		103	114

- (2) 幼児は五感を通じた豊かな体験をし、心身ともに健康でたくましい子どもに育てたい。そのためにめざす子ども像として「すこやかな子」「思いやりのある子」「よく考える子」を基本にした。年間行事を通じて四季折々の日本の伝統文化を学んだり、学園内の豊かな自然環境を活用して子どもが、興味や関心を持って意欲的に取り組む感性豊かに育つよう指導を心がけてきた。
- (3) 教職員は実践的な研修を積極的に積み、子どもの「生きる力」の基礎を養うために自らの資質向上に努めてきた。
- ① 園児一人ひとりの4～5月の姿から、指導・援助・かかわり方をどのようにしていくのか、学級実態報告をした。その上にたって、全員が年間を通して1回の園内研修・事例研修を行い、資質向上に努めた。本年30年度の研究テーマは、「幼児期の学びの芽生えを小学校以降の学びへとつなぐためには～どのような遊びや経験、体験、環境が必要か～」の研究をした。年度の終わりには、1年間の実践をパネルにし、保護者に見ていただいた。
 - ② 保育者一人ひとりが週日案及び、指導計画の作成をし、日々、保育を実践したことの反省・記録を書いてきた。そして、週末には週日案の記録を園長に提出し、コメントを入れ、明日への保育に繋げていけるよう資質向上に努めてきた。また、私立幼稚園研修、ミドルリーダー研修、などに参加し、その指導力の向上に努めている。
 - ③ 平成30年度より「新幼稚園教育要領」が全面実施となり、幼児教育の見直しが図られたところは、真摯に学び、実践で検証し、幼児のよりよい育ちと生活に繋げていくように研修を行っている。
- (4) 地域や家庭、学園内組織との連携を更に深める取り組みとして、総合学園としての教職員連携体制を年間計画に位置づけ、継続性のある幼児教育を進めてきた。幼小連携では、年度初めに年間計画を見直し、交流学年と事前・事後の話し合いをしてきた。そして、年度末には反省会をし成果と課題を出し合い、次年度につなげている。特に年長児にとっては、小学校への期待感が大きく膨らんでいる。短大から毎週全園児にリズム指導にきてくださっていることは、園児にとっては姿勢をよくしたり、リズム感や敏捷性につながっている。また、英語指導に専門教員が学年ごとに入ってくれている。園児は喜んでこの時間を待っている。

3 人事計画

4月当初から5クラス編成（満3歳児）となる。園長を含め本務教員5名、兼務教員9名（時間講師3名を含む）兼務職員4名、計18名で担当した。

4 教育・研究実績

(1) 教職員の資質向上

- ① 文献、幼稚園教育要領指導書を輪読するなど、教育内容を検討した。
- ② 研究保育、研究協議を行い、園内事例研修の場を持った。
 - ・各職員が園内研修（園内の職員で保育を参観しあい、その後協議をする）を5回実施した。協議内容は、園の研究テーマに基づき、視点を持って子どもの姿を振り返り、記録したことを、各々意見を出し合い、園全体として保育を高めてきた。
 - ・各クラスが事例研修協議を行った。（1学期と3学期にそれぞれ1回ずつ）事例を共有して、子どもの育ちや保育者のかかわりなどについて、よかったことや改善することを確認し話し合った。
 - ・本年度の研究テーマについてレポートを書き、年度末に1年のまとめとして冊子（「なのはな」16号に記載）を作成した。
- ③ 研究会・研修会への参加
 - ・私立幼稚園連合会夏季研修会、幼児教育研究協議会に参加し、保育の質を高めた。
 - ・ミドルリーダー研修等に参加し、資質向上に努めた。

(2) 学園内組織との連携

高知学園短期大学幼児保育学科や生活科学学科、医療衛生学科、高知リハビリテーション学院言語療法学科、中学高等学校との連携を密にすると共に、高知小学校とのきめ細かな連携を深め幼児教育の連携を進めた。

- ① 幼児保育学科との連携
 - ・毎週月曜日リズムの指導（年少～年長）
 - ・教育実習（H30.6.4～6.30）実施
 - ・観察実習（H31.2.18～2.23）実施
- ② 生活科学学科との連携
 - ・クリスマスケーキ作り（H30.12.19）実施…24家庭親子参加
- ③ 医療衛生学科との連携（歯科衛生専攻）
 - ・学生による歯磨き指導（年長児を対象）を実施（H30.5.18）
- ④ 各学科との健康教育（全園児対象）の実施（H30.5.19）
- ⑤ 高知リハビリテーション学院との連携
 - ・園児（年中・年長児）が訪問し、学生と交流実施（言語療法学科）（H30.10.22、11.12）
 - ・全園児の体力測定を行った（理学療法学科）（H30.9.11）
- ⑥ 中学・高等学校との連携
 - ・中学校家庭科の授業で中学2年生が4回来園。
- ⑦ 短大学園祭に参加した。（H30.10.20）
- ⑧ 幼小連携を強化し、活性化を図った。
 - 1～3,5年生の各学年と交流
 - ・平成30年6月1日（金）読み聞かせ（3年生と全園児）
 - ・ 〃 6月4日（月）さつまいものつる植え（2年生と年長）
 - ・ 〃 6月5日（火）田植え体験（5年生と年長）

- ・ 〃 6月14日(木) 学校探検(1年生と年長)
- ・ 〃 7月21日(土) 「すこやか2018」でのステージ発表(年中・年長)
- ・ 〃 10月2日(火) 小学校運動会への参加(全園児)
- ・ 〃 10月12日(金) お米の収穫(5年生と年長)
- ・ 〃 10月15日(月) 英語で遊ぼう(授業参加)(1年生と年長)
- ・ 〃 11月16日(金) 17日(土) 学習発表会への参加(年長児)
- ・ 〃 11月20日(火) 誕生会での歌の発表(3年生と全園児)
- ・ 〃 11月21日(水) 芋ほり(2年生と年長)
- ・ 〃 12月7日(金) おいもパーティー、昔遊び(2年生と全園児)
- ・ 平成31年1月17日(月) 授業参加・お弁当(1年生と年長)

○年度末に交流のまとめの冊子作成をした。

(3) 異年齢保育の取り組み

○グループでの遊び等を通して人間関係を持ち、思いやりの心を育てるように取り組んだ。

- ・ 学園内のお散歩、栽培活動、焼き芋パーティー

5 その他

○交通安全、避難訓練(地震、火災、水害)、防犯訓練等を継続的に行い、安全確保に努めた。

- ・ 交通安全教室(H30.11.9)実施
- ・ 避難訓練の実施(毎月)
- ・ 東日本大震災から8年が経過し、福島大川小の事例を学び、生命の大切さを改めて知り、避難訓練実施の重要性を認識した。

○地域とのかかわり

- ・ 運動会、バザー・作品展、表現発表会等のポスターを配布し地域の方々にも見学に来ていただいた。

[5] 高知リハビリテーション学院

1 重点目標と取り組み

国の社会保障政策や医科学の進展に対応していくことができる理学療法士・作業療法士・言語聴覚士を教育・養成していくため、重点目標を定め、取り組んできている。

全国に先駆けてリハビリ専門職の育成教育にあたってきた先進・進取の気風を承継し、発展させていくため、これに相応しい教育環境の整備に力を注いできた。

蔵書3万冊、最新の検索システムを備えた新図書館棟の整備を皮切りに、平成29年度までの間3カ年で、最先端の教育システムの導入・整備に努めた。

また、平成29年5月に学校教育法が55年振りに改正され、特定のプロフェッショナルになるために必要な理論と実践を学べる大学（専門職業人を育成していく高等教育機関）として、専門職大学が創設された。

専門職大学は当学院が目指す高度な医療専門職業人教育のためには時宜を得た方向であることから、平成31年4月の大学化に向け、平成29年11月に国に設置認可の申請を行い、平成30年10月11日に認可となった。

[主要な項目と平成30年度の取り組み]

(1) 先進・進取の伝統の継承と発展

平成30年に開学50年を迎え、全国に魁けて医学的リハビリテーションを我が国の職業教育に導入した本学院の先見性と培われてきた伝統を継承し、さらに発展させていくため、柔軟な発想と思考性のもとでの授業の展開等に努めていくとともに、地域リハビリテーションや在宅ケアなど、国の社会保障政策を見据えた教育を推進した。

(2) 有為な人材、信頼される療法士の育成

現場に即応できる有為で信頼される人材を育成していくため、学生一人ひとりに応じ、4年間での到達度を設定したプログラムをもとに個別指導を深化させ、スタディ（学習）・ソーシャル（社会性）双方のスキル（技能）をアップさせる指導を行った。

国家試験対策については、1年次から全国レベルの演習や評価手法の導入を図るとともに、2年次からの徹底した傾向分析に基づく、専門分野の共通試験の反復・実施した。

(3) 先駆的な教育・研究環境の整備

医科学の進展に即し、常に医療現場のニーズに応じていくことができるよう教育研究機器と教育の質及び内容の点検・再構築に重点的に取り組み、先端の教育システムと設備を備えた環境整備に努めた。

特に、急性期医療から在宅療養への対応まで、高度で多様なニーズに応えることができる専門性の高い療法士への需要が高まっていくものと考えられることから、こうした面での教育に注力してきた。

(4) 地域とともに歩む学院づくり

土佐市及びその関係機関等との連携のもと、市民や地元学校と提携した健康増進のための学習

講座や諸行事の開催など、地域での保健・福祉活動などを重視した学校運営に努めた。

2 教育研究計画

(1) 学生のスキルアップ

補講や休暇を活用した授業などにより、基礎学力の向上を図るとともに、専門知識、技能の習得に必要な基礎教科の重点指導に努め、スタディースキル（学習技能）をアップさせていく取り組みを進めた。

また、療法士に不可欠なコミュニケーション能力の向上、社会人としての礼節、至誠心といったソーシャルスキル（対人的技能）をアップさせていくため、専門家を招へいした教育指導や実践研修を推進した。

(2) 教員の研鑽、研究活動の促進

教員の資質の向上を図っていくため、教授法などに関する専門研修や教育研究大会などへの派遣といった取り組みとともに、教員と臨床現場との意見交換会を開催するなど、最前線の情報収集と技術力の向上などに努めた。

また、学会などを通じ、研究活動の成果の発信に努めた。

（論文掲載 12 件、学会発表 39 件）

全国の臨床実習受入施設の責任者を招へいし、専門的知見や技術、情報等を交換する指導者協議会には 193 名（170 施設）が参加、リハビリテーション現場で直面する課題などに対する討議と分科会での検討も行った。

3 学生募集に関する取り組み

(1) 専願による学生の確保（専門職大学）

設置認可の時期が大幅にずれ込み、10 月中旬となったこともあり、募集活動や試験日程等に大きな影響が出た。その影響を少しでも埋めれるように教職員が一体となり、学校訪問や進路相談会、出前講座の開催といった取り組みを重点的に推進した。高知高校とのフェローシップによる学生（入学 11 名）を含め、平成 31 年 4 月の入学生に占める専願での入学生は 115 名であった。

入試では、このほかに一般推薦、社会人選考などを行い、132 名の学生の入学となった。

(2) 学校訪問や進路相談会などの開催状況

学校訪問専門の職員を配置し、県内高校については、原則、毎月 1 回、四国 3 県についてはオープンキャンパスや入試前に重点的に訪問し、進路担当教職員との面談、情報提供などに努めた。

進路相談会については、県内はもとより中四国各地でも開催しており、高校主催のものも合わせると 78 回（701 名受付）行った。平成 30 年度は 9 名の県外高校（5 県）からの学生が在籍した。（平成 31 年 4 月入学は県外 14 名。）県内高校の進路指導教員を本学院に招へいして行った説明会には 26 校（36 名）からの参加があり、幡多地区で行った説明会でも 6 校（8 名）の参加を得た。

オープンキャンパスには延べ 840 名（生徒 538 名・保護者 302 名）が来校。平成 30 年度か

ら年7回開催とし、その内容も医療知識の修得と職業観の醸成につながる体験型のものを中心に行ってきた。また、11月に2度入試説明会も実施し、生徒68名保護者23名の参加があった。

4 就職に関する取り組み

教職員一丸となり新規開拓、情報収集等を行うため施設訪問を重ねるとともに、9月末には高知会館にて就職合同説明会を開催、県内外の59施設の人事担当者と学生が直接面談する場を設けるなど、引き続いての全員就職に向け取り組んだ。

総求人件数は2,053件、その求人数は7,390名に上り、就職希望者127名のうち、年度内には124名（県内に63名、県外に61名）の就職が内定した。

5 教職員の状況

人事計画では本務教員30名、兼務教員87名、本務職員12名、兼務職員17名としていたが、兼務教員は93名となった。本務職員と兼務職員数に変更はなかった。

参考

表1：入試選考

専門職大学

区 分	定 員	平成 31 年 4 月入学者		平成 30 年 4 月入学者	
		志願者	入学者	志願者	入学者
理学療法学科	70	75	67	70	66
作業療法学科	40	44	34	35	33
言語療法学科	40	43	31	22	19
合 計	150	152	132	127	118

学生数（4月）：平成26年度 581人：平成27年度 601人：平成28年度 589人
 ：平成29年度 554人：平成30年度 516人：平成31年度 480人

表2：国家試験

区 分	平成 30 年度			平成 29 年度	
	受験者	合格者	合格率	合格者	合格率
理学療法学科	73	61	84% (86%)	57	89% (81%)
作業療法学科	39	30	77% (71%)	25	78% (76%)
言語療法学科	33	23	70% (69%)	24	83% (79%)

・合格率の（ ）は全国

表3：就職状況

(平成31年3月末現在)

区 分	平成 30 年度				平成 29 年度		
	卒業生	就職希望者			就職希望者		
		総数	就職内定先		総数	就職内定先	
			県内	県外		県内	県外
理学療法学科	73	63	30	30	62	30	32
作業療法学科	39	36	21	15	27	12	15
言語療法学科	33	28	12	16	25	10	12
合 計	145	127	63	61	114	52	59

・求人件数と求人数：2,053件、7,390人（平成29年度：1,863件、6,566人）